

茨城県那珂郡大宮町

かみ じゅく かみ つぼ  
**上宿上坪遺跡**  
**発掘調査報告書**

平成16年3月  
株式会社 ダイナム  
大宮町教育委員会

茨城県那珂郡大宮町

かみ じゆく かみ つぼ  
上宿上坪遺跡  
発掘調査報告書

平成16年3月

株式会社 ダイナム  
大宮町教育委員会

## ごあいさつ

大宮町は茨城県の北部に位置し、町域は久慈川と那珂川に挟まれ、全体的に北部が高く、南部が低い傾斜をした丘陵地を形成しています。この二大河川の沿岸には、肥沃な土地が開け、豊かな自然に恵まれ古くから人々の生活の場となり、多くの歴史を重ねてきております。

そのため町内には、古墳、塚、集落跡など数多くの遺跡が存在しており、これらの遺跡は当時の様子を知る手がかりとなることはもちろんのこと、現代の私たちが豊かに生活をすることができる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり、郷土の発展のためにも貴重なことと考えております。

このたびの調査は、遊技場建設工事に伴い、周知の遺跡である上宿上坪遺跡の発掘調査による記録保存を目的に行ったものであります。

遺跡内からは縄文時代、奈良平安時代、中世の遺構・建物が検出されました。この調査報告によって、この地域の祖先の遺業をしのぶことができるとともに、文化財に対する認識がいつそう深まり、遺跡愛護の精神や郷土の文化を培う上で貴重な資料として役立てていただければ幸いです。

最後になりますが、この発掘調査にあたり、格別のご指導を賜りました茨城県教育庁文化課並びに瓦吹堅先生、そして調査にご協力いただきました地元の関係者、また、一切の経費をご負担いただきました事業所株式会社ダイナム様、適正かつ慎重な調査をいただいた発掘業者有限公司社員研修課様、各位に心から厚く感謝を申し上げます。

平成16年3月

茨城県那珂郡大宮町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、店舗建設に伴い、有限会社日考研茨城により行われた発掘調査報告書である。

2. 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

本調査 上宿上坪遺跡（かみじゅくかみつけ） 大宮町宇留野字上坪193に所在する。

3. 御日考研茨城が株式会社ダイナムからの委託を受けて、茨城県教育委員会および大宮町教育委員会の指導のもとに発掘調査を下記の期間に実施した。

平成15年7月22日～15年8月22日

4. 発掘調査組織は下記の通りである。

調査担当者 大沢淳志 日本考古学協会員 （有）日考研茨城

調査員 遠藤啓子 （有）日考研茨城

調査員 大沢由紀子 （有）日考研茨城

事務局 大宮町教育委員会生涯学習課

整理作業は、大宮町教育委員会の指導のもとに、小川和博・大沢淳志・遠藤啓子・大沢由紀子・大野美佳（以上御日考研茨城）が行なった。

5. 本書の編集執筆は、小川和博・大沢淳志が行った。

6. 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

7. 本書中の色調に関する表現は新版標準土色帖（農林水産技術会議事務局監修2000年版）に従った。

8. 遺構および遺物の写真撮影は大沢淳志・小川和博が行った。

10. 記録および出土遺物は、大宮町教育委員会が保管している。

11. 発掘調査および報告書の作成に当たり、以下の方々のご教示・ご高配を賜った。記して、深く謝意を表す次第です。（敬称略・順不同）

茨城県教育委員会、（財）茨城県教育財団、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場、阿久津久、瓦吹堅、比毛君男、船田義弘、大塚雅昭、川村満博、越田真太郎、藤崎芳樹、越川敏夫、黒沢哲郎、戸村勝司朗、荒井世志紀、鬼沢昭夫

12. 各調査には以下の者が参加した。

佐藤忠、佐藤みさを、井澤良忠、井澤しいつ、佐藤富夫、佐藤豊、佐藤寅、栗山光男、川崎東功、渡辺昇次郎

13. 遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。

竪穴住居跡：S I 構状遺構：S D 土坑：S K 竪穴状遺構：S X 柱穴：P

擾乱：K

## 本文目次

序文	
例言	
第Ⅰ章 序章	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過とその概要	1
第3節 調査日誌	1
第4節 遺跡の位置と周辺遺跡	3
1 遺跡の位置	3
2 周辺の遺跡	5
第Ⅱ章 検出された遺構と遺物	7
第1節 概要	7
第2節 縄文時代	7
1 壺穴住居跡	7
2 遺構外の出土遺物	9
第3節 弥生時代	9
第4節 古代	10
1 壺穴住居跡	10
2 溝状遺構	18
3 土坑	20
第5節 中世	26
1 概要	26
2 溝状遺構	26
3 土坑	31
第Ⅲ章 まとめ	39

## 挿図目次

Fig. 1	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
Fig. 2	上宿上坪遺跡周辺地形図	4
Fig. 3	遺構配置図	6
Fig. 4	住居跡SI05実測図	8
Fig. 5	住居跡SI05出土遺物	8
Fig. 6	遺構外出土遺物	10
Fig. 7	住居跡SI01実測図	11
Fig. 8	住居跡SI01出土遺物	12
Fig. 9	住居跡SI02実測図	14
Fig. 10	住居跡SI02出土遺物	16
Fig. 11	住居跡SI03実測図	17
Fig. 12	住居跡SI03出土遺物	17
Fig. 13	住居跡SI04実測図	19
Fig. 14	住居跡SI04出土遺物	19
Fig. 15	溝状遺構SD01、03実測図	21
Fig. 16	土坑SK01、02、03、04、05、07実測図	24
Fig. 17	土坑SK08、10実測図	25
Fig. 18	溝状遺構SD01、03 土坑SK07出土遺物	25
Fig. 19	溝状遺構SD06、08実測図	28
Fig. 20	溝状遺構SD09実測図	30
Fig. 21	土坑SK11、12、13実測図	32
Fig. 22	土坑SK14、15、16実測図	34
Fig. 23	竪穴状遺構SX01、02実測図	36
Fig. 24	中世 竪穴状遺構SX02 溝状遺構SD06、08出土遺物	37
Fig. 25	中世 溝状遺構SD08(2)、SD09 土坑SK13出土遺物	38

## 写真図版目次

PL. 1	遠景 A区全景 A区全景	
PL. 2	B区全景 竪穴住居跡SI05 竪穴住居跡SI05	
PL. 3	竪穴住居跡SI01 竪穴住居跡SI01カマド 竪穴住居跡SI01掘形	
PL. 4	竪穴住居跡SI02 竪穴住居跡SI02カマド 竪穴住居跡SI02掘形	
PL. 5	竪穴住居跡SI03 竪穴住居跡SI03カマド 竪穴住居跡SI03掘形	
PL. 6	竪穴住居跡SI04 竪穴住居跡SI04 竪穴住居跡SI04カマド	
PL. 7	溝状遺構SD03 溝状遺構SD03 土坑SK05	
PL. 8	竪穴状遺構SX01 溝状遺構SD08 溝状遺構SD08硯出土状況	
PL. 9	溝状遺構SD09 溝状遺構SD09 溝状遺構SD09獸骨出土状況	
PL. 10	竪穴住居跡SI05出土遺物 遺構外出土縄文土器 遺構外出土石器	
PL. 11	竪穴住居跡SI01出土遺物	
PL. 12	竪穴住居跡SI02・SI04 溝SD01・SD03 土坑SK07出土遺物	
PL. 13	竪穴状遺構SX01 溝SD06・08 中世溝SD09 中世土坑SK13	

PL.14 溝状遺構SD06・SD08・SD09 古代住居址SI04、中世溝SD08  
中世溝出土遺物SD08

## 別 表

1. 出土土器觀察表

## 第1章 序章

### 第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、店舗造成に伴う事前調査である。平成15年3月5日に株式会社ダイナムから大宮町教育委員会に埋蔵文化財所在の有無の照会が提出され、それに基づき、町教育委員会は同年5月24・25日の2日間造成予定地内に試掘調査を実施した。調査はトレンチ方式で、試掘の結果竪穴住居跡2軒をはじめ、土坑や溝状遺構が検出され、明らかに古代の集落が所在することが判明した。6月13日に茨城県教育委員会との協議により、本調査を実施することとなり、(単)日考研茨城に調査依頼を行う。承諾後大宮町教育委員会・株式会社ダイナムおよび(単)日考研茨城は三者協議を行い、確認調査の結果に基づき平成15年7月22日から同年8月22日まで本調査を実施した。

(大宮町教育委員会)

### 第2節 調査経過とその概要

本遺跡における発掘調査は、平成15年に実施された試掘調査の結果に基づき、その調査範囲が確定され、同年7月22日より開始した。ここは開発計画によって3ブロックに分かれ、最も広い範囲である店舗建設予定地をA区、ここから南側の調整池予定地をB区、さらに東側の浄化槽建設予定地をC区と呼称し、まずA区から重機による表土層除去から始めた。表土層除去後人力による遺構精査を実施、A区において竪穴住居跡5軒、竪穴状遺構2基、土坑9基、溝状遺構8条を検出した。また南側のB区では溝状遺構1条、土坑14基を検出した。なお、東側のC区では当初確認調査を行い、遺構検出の段階で本調査に移行することとなっていたが、結果遺構・遺物はなく試掘トレンチのみで終了する。

調査は同年8月22日確認された全ての遺構を調査し完了するが、純文時代中期の住居跡1軒、奈良平安時代の住居跡4軒、溝2条、土坑8基、西側に展開している宇留野城跡との関わりがある中世では竪穴状遺構2基、溝状遺構3条、土坑6基を検出。さらに近世以降と推定される溝状遺構4条と土坑9基を調査した。

(大河 淳志)

### 第3節 調査日誌

2003年7月23日～8月22日

7・22 本日より本調査を開始する。発掘器材の搬入。調査範囲を確定し、重機による表土層除去を開始する。

7・23 重機による表土層除去作業の継続。本日より作業員を導入し遺構確認精査を開始する。

7・24 重機による表土層除去作業を継続する。

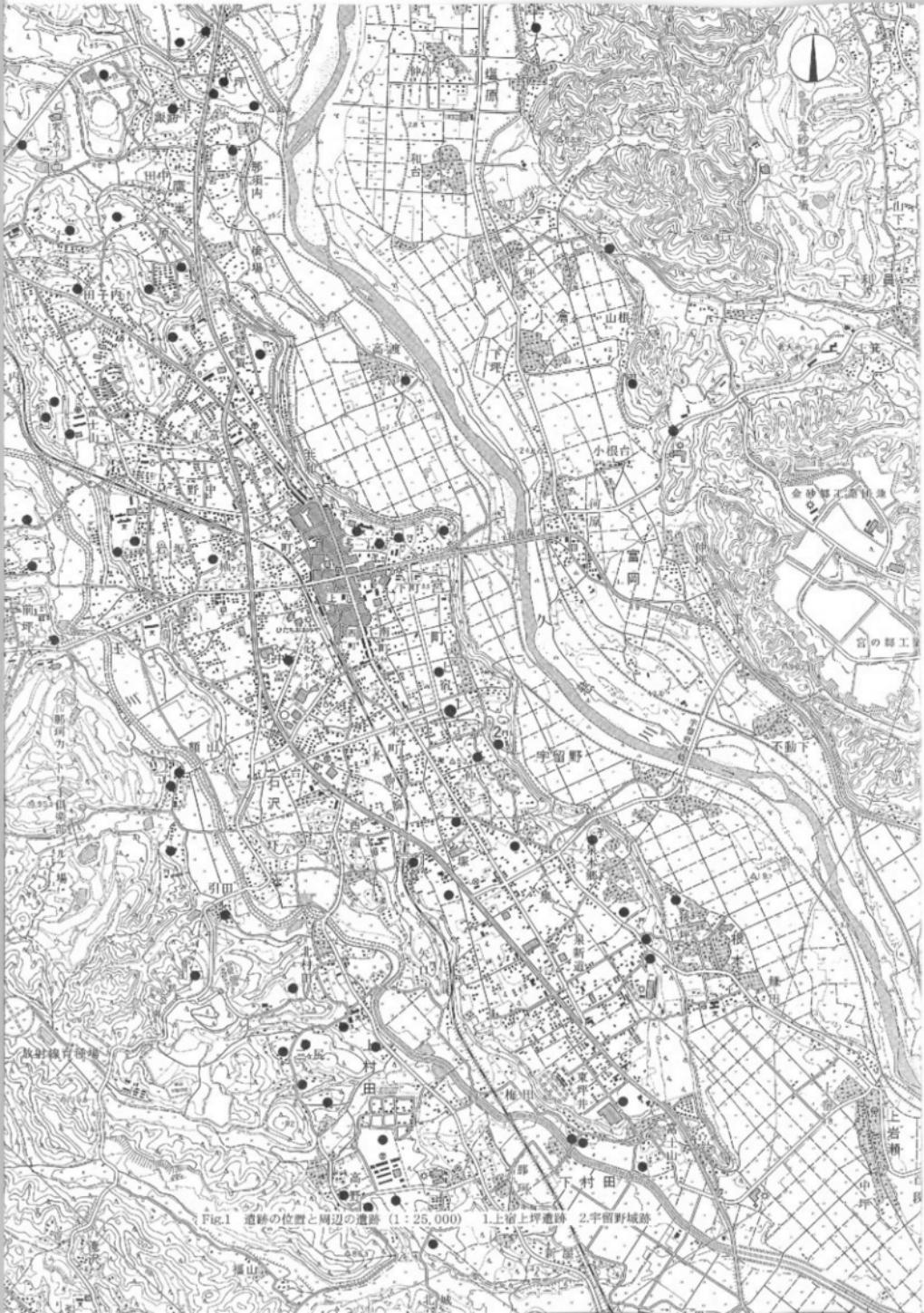


Fig.1 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000) 1.上宿上坪遺跡 2.宇留野城跡

- 7・25 遺構精査の継続。溝状遺構SD1・2を検出する。
- 7・28 遺構精査の継続。溝SD1・2の発掘。土坑SK1～4を検出し、調査を開始。本日にて重機による表上層除去を完了する。
- 7・29 溝SD2・3および土坑SK1～6の覆土除去を継続する。住居跡SI1の調査を開始する。
- 7・31 住居跡SI1の調査継続および新たに検出されたSI3の発掘。土坑SK1～5の平面実測。竪穴状遺構SX1、溝SD2、土坑SK6の断面実測。また溝SD2～5、土坑SK1～7の発掘を継続する。
- 8・1 住居跡SI1・3の調査継続および新たに検出されたSI2・4の発掘。竪穴状遺構SX1、溝SD2・6・7の発掘。
- 8・4 住居跡SI2・4の調査継続。土坑SK8・9の発掘。また溝SD6・7の発掘を継続する。住居跡SI2および溝SD2～5平面実測。
- 8・5 溝SD6・8の発掘を継続する。住居跡SI3・4の平面実測。
- 8・6 溝SD6・8の発掘を継続。竪穴状遺構SX2、溝SD3・6・7の平面実測。
- 8・7 溝SD8、竪穴状遺構SX2の発掘を継続する。住居跡SI1～3のカマド発掘。住居跡SI2～4の掘形調査。
- 8・8 溝SD6、竪穴状遺構SX2の発掘を継続する。住居跡SI1のカマド発掘継続。住居跡SI1～3の掘形調査の継続。調査区全体測量。
- 8・18 南側B区の調査を開始する。B区表土層除去をすすめる。A区土坑・竪穴状遺構・溝の写真撮影を行なう。
- 8・19 B区の遺構確認のため精査をすすめる。溝SD9、土坑SK10～12の発掘を開始する。
- 8・20 B区の遺構確認のための精査継続。溝SD9、土坑SK10～16の発掘を完了する。
- 8・21 B区の検出遺構平面実測を完了する。
- 8・22 B区の全景写真撮影を行い全ての調査を完了する。機材撤出作業。

(大渕淳志・小川和博)

#### 第4節 遺跡の位置と周辺遺跡

##### 1. 遺跡の位置

上宿上坪遺跡は、茨城県那珂郡大宮町宇留野字上坪に所在する久慈川右岸に位置する台地の東側縁辺部に立地する。周知の遺跡としての上宿上坪遺跡は、縄文時代中・後期、古墳時代から中世の遺物が散布する集落跡であり、その遺跡範囲の南東側は隣接する宇留野城跡と重複する。

本調査地点は、上宿上坪遺跡の西側に位置するが、周知の遺跡として知られていた上宿上坪遺跡の範囲外にあったが、調査の結果、奈良時代の竪穴住居跡、中世の溝状遺構等が検出されていることからも、少なくとも、上宿上坪遺跡は、本地調査地点までは広がっているものと考えられる。また、本調査地点の南側に東西



Fig.2 上宿上坪遺跡周辺地形図 (1:3,000)

に走る舌状の谷が存在し、その南側の低地部に向かって、北から南へ緩やかな斜面が形成されている。なお、本調査地点の標高は49～53mを計測する。

## 2. 周辺の遺跡

上宿上坪遺跡の本地調地点同じ台地上で北側に隣接する周知の遺跡として、上ノ宿遺跡が存在する。上ノ宿遺跡は、縄紋時代中期・古墳時代～平安時代にかけての遺物が分布する遺物散布地である。上宿上坪遺跡と舌状の谷を挟んだ南側に位置する遺跡として、仲下遺跡が周知されている。仲下遺跡も、上宿上坪遺跡、上ノ宿遺跡とほぼ同じ時期の縄紋時代中期・古墳時代～中世にかけての遺物を散布する集落跡と推定されている。また、上宿上坪遺跡、仲下遺跡は隣接する宇留野城跡の範囲内と一部遺跡の範囲内が重複している。上宿上坪遺跡の本調査地区から検出された中世の遺構は、宇留野城跡との関連が考えられる。

宇留野城跡は久慈川を望む台地東辺に位置し、侵蝕谷を利用して構築されている。この城は中央の侵蝕谷を挟んで、字御城、字中城、字外城という三つの小字の残る東側の三つの郭（おそらく、主郭を含む）と、西側の四つの郭の計七つの郭より構成された、侵蝕谷の両側で構築された二列の連郭式城郭と考えられている。なお、上宿上坪遺跡の本調査地点と隣接する南側の谷津は、この宇留野上跡の郭を2つに分ける侵蝕谷が続く谷であった。宇留野城跡の東側の郭列は、ほとんど完全な形の土塁や堀が現存している。谷津の西側の郭群は、耕地化・住宅化したため、土塁や堀などの城郭の遺構はほとんど残っていない。なお、この宇留野城主である宇留野氏については不明な点が多いようである。『水府志料』所収の文書等によれば、宇留野大輔宏瑜という高位の僧侶が地頭職を永仁五年（1297）にこの地に任せられたとなっている。また、『佐竹秘録』などの文献によれば、天正19年（1591）に佐竹氏二〇代目義宣が水戸城の御移え前に宇留野源太郎氏御列座と書かれている。

（大潤 淳志）

参考文献『大宮町史』（大宮町、昭和52年）

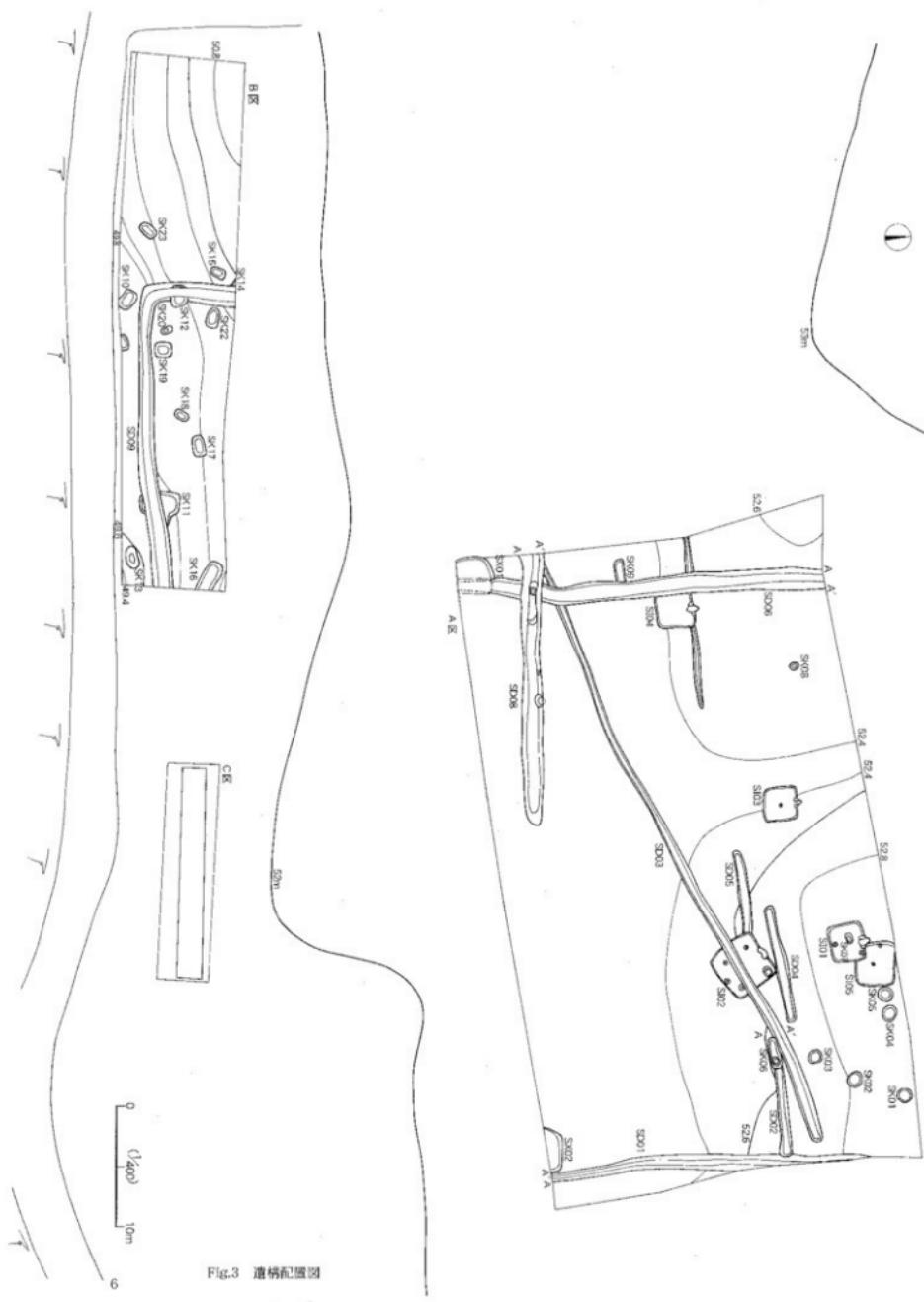


Fig.3 清模配置图

## 第Ⅱ章 検出された遺構と遺物

### 第1節 概要

本調査では縄文時代から近世に至るまでの遺構・遺物が確認されているが、継続されたものではなく、縄文時代、古代、中世の遺構が確認されている。縄文時代では中期の竪穴住居跡1軒、古代では竪穴住居跡のほかに溝状遺構や土坑を検出した。また中世は遺物を含め比較的まとまりある遺構を確認している。とくに溝状遺構については隣接する「宇賀野城跡」との関わりで十分注意を要する遺構のひとつであり、また南側堀は外堀と推定されている。なお、断片的であるが弥生時代では遺物のみ出土している。

### 第2節 縄文時代 (Fig. 4 ~ 6)

#### 1. 竪穴住居跡

縄文中期と推定される竪穴住居跡1軒が検出されている。方形系統に属するもので、覆土中から胴部下部の深鉢土器が出土している。無文で明確な時期を決定できないが、大木8(b)式と推定される。

住居跡 S 105 (Fig. 4 ~ 5)

位置 調査区のA区北東側。標高52.65~52.86mに位置する。

規模・構造 長軸3.52m、短軸3.24mで、平面形態は圓角方形を呈する。なお、南東コーナーで竪穴住居跡 S 101に切られ、北西壁の一部が未調査区域に入っている。

主軸方位 長軸を主軸とするとN - 2° - Wを示す。

壁 確認面からの深さは8~29cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床 ほぼ平坦で、若干北側が低くなっている。直床で、明瞭な硬化面は少なく、床面中央付近にわずかに認められる。

炉 検出できなかった。

ピット 柱穴は2本検出されている。西壁中央のP 1は形状が円形で、径24×25cm、深さ44cmを測る。また住居跡中央に位置するP 2は、形状は楕円形で、径23×28cm、深さ51cmを測るセンターピットである。

覆土 2層が確認された。いずれも自然堆積土層である。上層である1層黒褐色土は微量のローム粒を含む。床面に接する2層黒褐色土は少量のローム粒を含む。しまりがあり、粘性がとむ。

遺物 (Fig. 5) 住居跡西側壁中央付近から胴部下半部の深鉢土器が出土した。底径10.0cm、現存器高18.0cmを測る。平底の底部から体部は直線的に立ち上がる。現存では文様施文は確認できず、上半は縦位、下半は横位のヘラナデ。底部は網代痕が認められる。胎土に雲母・石英・長石粒を多量に含み、色調は橙色(5 YR 6/6)を呈する。胎土から判断して中期・大木8(b)式土器と推定される。

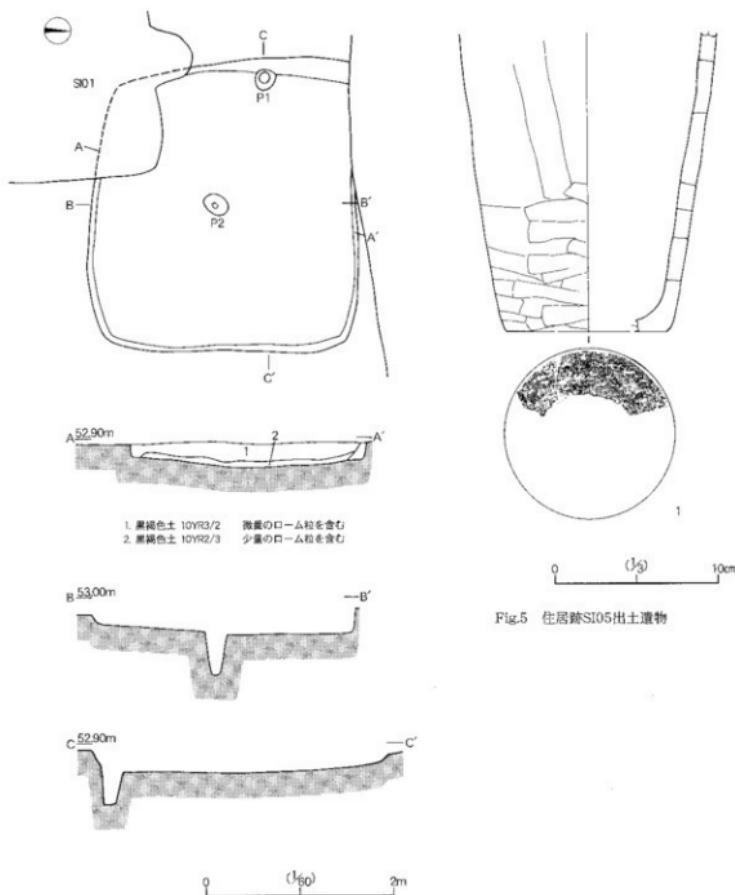


Fig.4 住居跡SI05実測図

Fig.5 住居跡SI05出土遺物

**所見** 四角形を呈する、2本柱構造の住居跡である。炉址は検出できなかったが、センターピットを作り、覆土西側から腹部下半の深鉢土器が出土している。無文で明確な時期を決定できないが、大木8(b)式と推定される。

## 2. 遺構外出土遺物 (Fig.6)

今回の調査において縄文時代の住居跡以外からも遺物が出土している。とくに縄文遺構を切って構築している住居跡S101と中世溝と推定される溝SD08からまとまっていた。なお、いずれも中期のみに限定されている。

**土器** (Fig.6-1~9) 1は中葉阿玉台式土器である。胴部破片で貝殻復縁文による刺突文で指頭圧痕文を置換したものである。胎土に雲母・石英粒を多量に含む。2~9は後葉大木8 b式および加曾利E式土器である。2は口縁部に近い破片。沈線が沿う隆帯区画文で、地文に単節RL縄文の横位施文。胎土に石英・長石粒を含む。3は頸部付近の破片。単節RLを地文に重疊する沈線による区画文をもつ。胎土に雲母・石英・黒色粒子・長石粒を含む。大木8 b式である。4は胴部破片。縄文地文に沈線によるモチーフを描出する。胎土に雲母・石英・長石粒を含む。5は頸部下位の破片。キャリバー形の深鉢で、沈線が沿う隆帯区画文に、磨消懸垂文が垂下する。器面の磨耗が著しく原体は不明。胎土に石英・長石粒を含む。6はやや大形の深鉢と推定する胴部破片である。単節LRを地文にやや幅広い磨消懸垂文を垂下させる。胎土に石英・長石・スコリア粒を含む。加曾利E3式土器。7も単節LRを地文に、沈線によって区画された懸垂文を垂下させる。胎土に石英・長石・スコリアを含む。加曾利E2式末もしくはE3式初頭。8は口縁部破片で、単節RL縄文を地文に、浅い沈線が沿う微隆起帶は曲線による区画文を表出する。加曾利E3式と推定する。9は深鉢の口縁部破片である。ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。口縁部は無文、区画文は微隆起文で、肩部は6本単位の櫛状工具による縦位の条線文である。胎土に微細な石英粒を含む。

**石器** (Fig.6-12~14) 12は打製石斧である。短冊形を呈し、完存品である。扁平な様の表裏面周縁に調整剥離が施され、裏面には自然面が一部残置している。粘板岩製で、長さ12.19cm、幅6.00cm、厚さ2.48cm、重さ210gを測る。表採資料である。13は砂岩製の磨石である。約半分以上が欠損している。表面に磨面が明瞭に残り、側面にも磨面と歯打痕が認められる。現存長6.25cm、幅7.58cm、厚さ2.98cm、重さ116gを測る。14は二次加工のある剥片である。チャート製で、下縁部に調整剥離が認められる。長さ2.20cm、幅3.03cm、厚さ0.65cm、重さ3.96gを測る。

## 第3節 弥生時代 (Fig.6-10・11)

弥生時代は、遺物のみで弥生時代後期の壺破片が2点出土したのみである。10は壺形土器の口縁部破片である。口縁部は大きく外反し、折り返し口縁を呈する。口縁部下端部はヘラ状工具による刺突列が巡る。口縁部外面および口唇部には付加縄縁文が施文されている。頸部はヘラによる浅い沈線文が施文されている。内面はヘラナデによって整形されている。胎土に石英・長石粒を含み、焼成は良好で、色調は黒褐色



Fig.6 遺構外出土遺物

(10YR3/2) を呈する。11は胸部破片である。付加条縞文を施文している。胎土に石英・長石粒を含み、焼成は良好で、色調は暗褐色 (10YR3/3) を呈する。

#### 第4節 古代 (Fig.7~18)

##### 1. 壺穴住居跡

奈良・平安時代と推定される壺穴住居跡4軒が検出されている。全体的に出土遺物は少なく、時期を決定する資料が十分ではないが、8世紀および9世紀代に比定される。

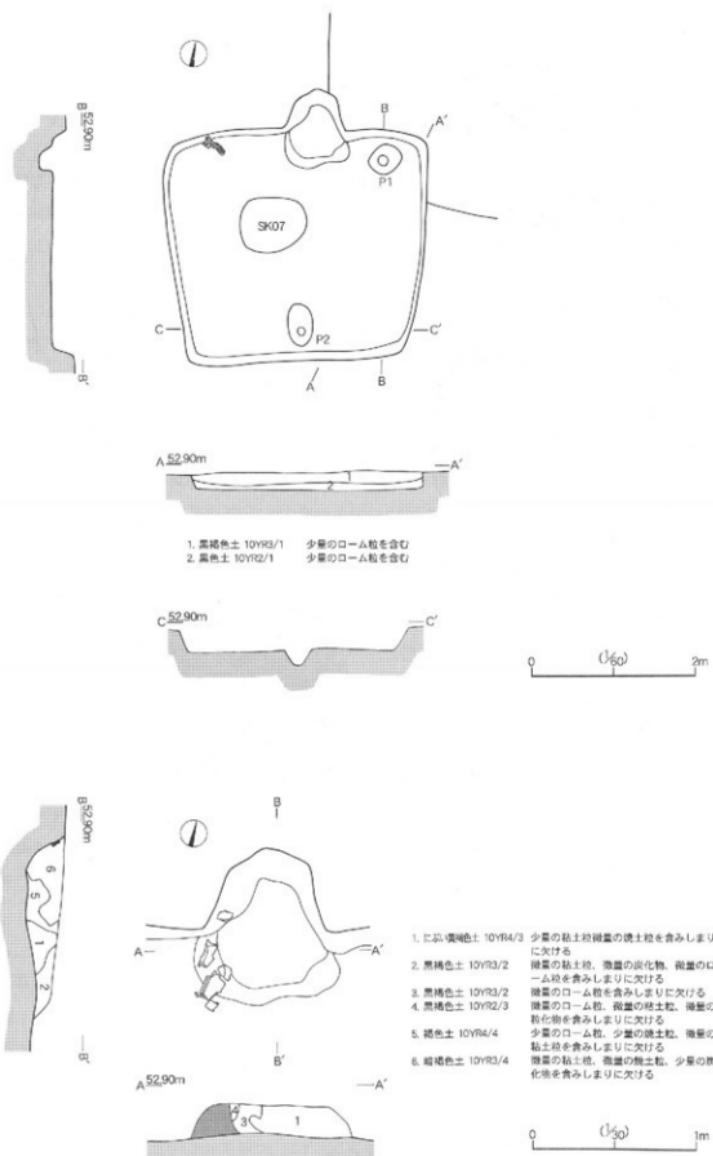


Fig.7 住居跡SI01実測図

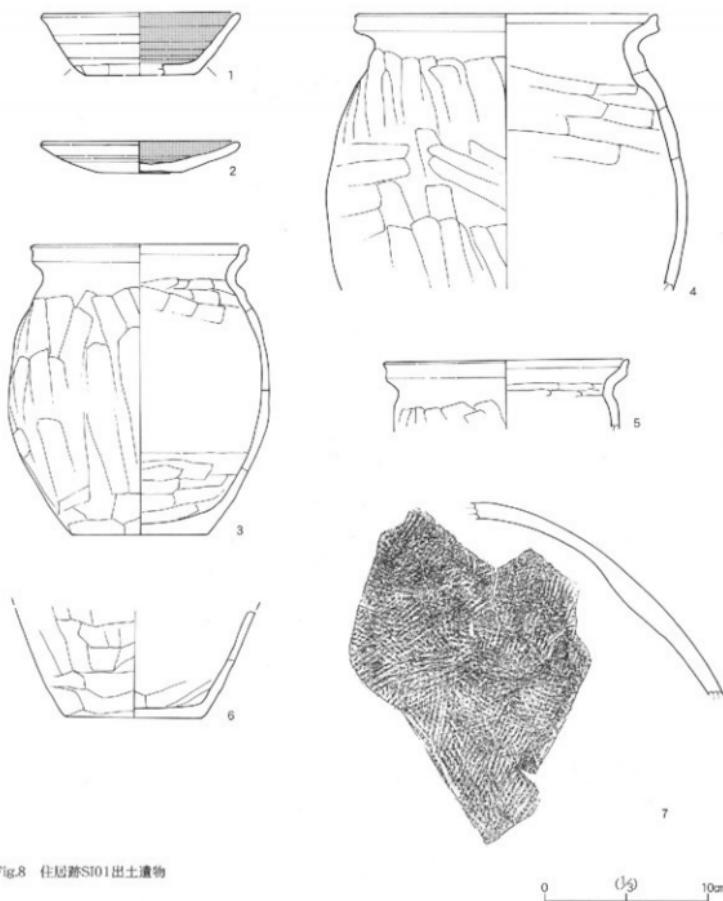


Fig.8 住居跡SJ01出土遺物

### 住居跡 S I 01 (Fig. 7 + 8)

**位置** 調査区のA区北東側。標高52.65～52.86mに位置する。

**規模・構造** 長軸3.12m、短軸2.85mで、平面形態は方形を呈する。なお、北東コーナーで縄文住居跡であるS I 05を切って構築している。

**主軸方位** 北壁にカマドが設置されており、主軸はN=9° -Wを示す。

**壁** 確認面からの深さは17～26cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

**床** ほぼ平坦で、若干東側が低くなっている。貼床で、硬化面はカマド前面および床面中央付近が顕著であった。掘形は全面的に認められる。

**ピット** 主柱穴とするものではなく、カマド脇P 1および南壁中央P 2の2本柱である。P 1は北東コーナーに位置し、形状は円形で、径33×38cm、深さ18cmを測る。P 2は入口部の梯子穴に相当し、形状は橢円形で、径29×51cm、深さ18cmを測る。

**カマド** 北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方位は住居跡と一致する。なお、大半が破壊され、その痕跡のみが残存している。したがってカマド堀形のみを計測すると、規模は長さ96cm、幅72cmの浅い掘り込みで、袖部は灰白色砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を混入して造られている。燃焼部は径66×68cm、深さ5cmの不正橢円形に掘り進められている。奥壁は60°の角度で立ち上がり、煙道部へ移行する。煙道部は裏面を掘削して構築されており、幅72cm、奥行48cmを測る。覆土は6層確認されているが、擾乱を受けているため、土層が乱れ複雑になっている。なお左袖部には土師器甕がまとまつて出土した。

**覆土** 2層が確認された。いずれも自然堆積土層である。上層である1層黒褐色土は少量のローム粒を含む。床面に接する2層黒色土も少量のローム粒を含む。

**遺物** (Fig. 8) 土師器坏、皿、甕および須恵器甕の破片が出土している。1は土師器坏でロクロ成形。器高に対して口径が大きい。体部下端は手持ちヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理を施している。2は土師器皿でロクロ成形。体部下半部は回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理。3～6は土師器甕。3～5は口縁部破片で、口縁部は外反し、端部で上方へ挿み上げられる。7は須恵器大甕の破片である。外面タタキ目で調整している。

**所見** カマド西側で炭化物が検出されているが、火災住居ではない。土師器坏や皿の出土遺物から判断して、9世紀後半と推定される。

### 住居跡 S I 02 (Fig. 9～10)

**位置** 調査区のA区東側。標高52.51～52.60mに位置する。

**規模・構造** 長軸4.23m、短軸4.41mで、平面形態は方形を呈し、ほぼ中央東西に走る溝SD 3によって切られ、さらに北東コーナーで溝SD 4、北西コーナーで溝SD 5によって切られている。

**主軸方位** 北壁にカマドが設置されており、主軸はN=27° -Wを示す。

**壁** 確認面からの深さは9～13cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

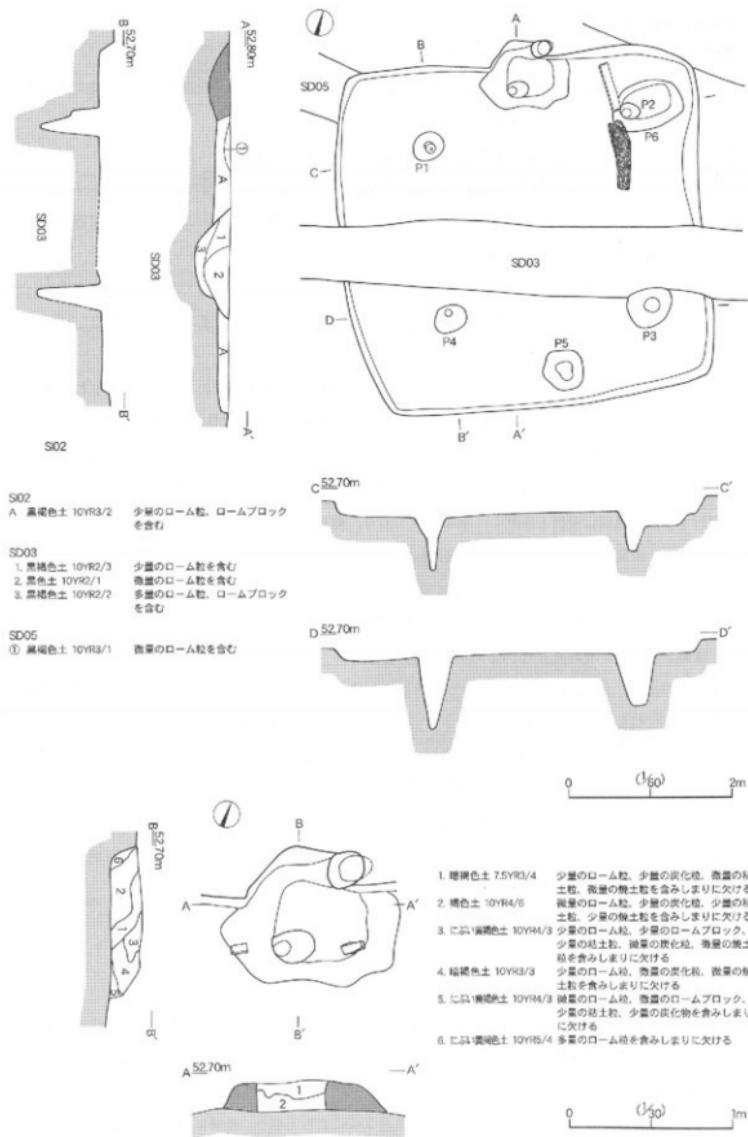


Fig.9 住居跡SI02実測図

**床** ほぼ平坦であるが、南東コーナー付近がやや低くなっている。貼床で、硬化面はカマド前面および床面中央付近が顕著であった。掘形は全面的に認められる。

**ピット** P 1～P 4が主柱穴で4本柱住居の構造をもつ。P 5は入口の梯子穴である。またP 6はカマド東側にあり、P 2と重複している土坑で、その形状から貯蔵穴と推定される。まず主柱穴P 1は北西側に位置し、形状は円形で、径34×39cm、深さ75cmを測る。主柱穴P 2は北東側に位置し、貯蔵穴P 6と共に検出された。形状は円形で径19×22cm、深さ30cmを測る。主柱穴P 3は南東側に位置し、形状は円形で、径43×51cm、深さ61cmを測る。主柱穴P 4は南西側に位置し、形状は円形で、径32×40cm、深さ60cmを測る。梯子穴P 5は南壁際中央に位置し、形状は円形で、径51×53cm、深さ28cmを測る。またカマド東側で、北東コーナー付近に位置するP 6は貯蔵穴と推定される。形状は長方形で、径59×80cm、深さ17cmを測る。

**カマド** 北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方位は住居跡と一致する。大きく破壊され、原状を保っていない。規模は長さ80cm、幅108cmで、構築材は凝灰質砂岩を棒板状に切り出し組み立てカマドとしていたものと推定するが、すべて前面の床上に散在していた。燃焼部は径48×57cm、深さ1cmの楕円形に掘り窪められ、火床面は明瞭ではないが、燃焼部とほぼ一致する。奥壁は60°の角度で立ち上がり、煙道部へ移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅67cm、奥行30cmを測る。覆土は6層を認されている。上層の1層暗褐色土は少量の炭化粒、ローム粒を含み、下層の2層褐色土層は少量の粘土粒・炭化粒・焼土粒を含む。なお、構築材である凝灰質砂岩が床面に散在したことから、カマド破壊は住居跡廃棄後、それほど時間を置かないで行なわれたものと推定される。

**覆土** 確認層は黒褐色土の單一層で、少量のローム粒、ロームブロックを含み、しまりがあり、粘性にとむ。自然堆積層である。

**遺物** (Fig.10) 土師器壺、甕が出上している。1・2は土師器壺で、底部は丸みをもち、口縁部はわずかに外反する。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。3・4は土師器甕の胴下半部の破片。3はやや丸みをもつ底部から体部は内湾気味に立ち上がる。体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。4は平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。体部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。

**所見** 床面上で炭化物が検出されているが、火災住居ではない。土師器壺の出土遺物から判断して、8世紀前半と推定される。

#### 住居跡 S 103 (Fig.11・12)

**位置** 調査区のA区北側。標高52.20～52.48mに位置する。

**規模・構造** 長軸2.87m、短軸2.72mで、平面形態は南北軸が僅かに長い方形を呈する。

**主軸方位** 北壁にカマドが設置されており、主軸はN-7°-Wを示す。

**壁** 確認面からの深さは5～18cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

**床** 貼床で、硬化面はカマド前面および床面中央付近が顕著であった。掘形は全面的に認められ、柱穴内

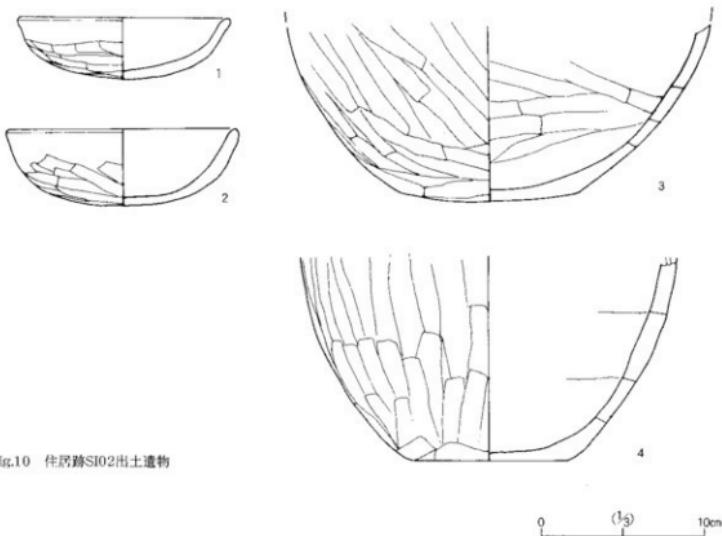


Fig.10 居跡SI02出土遺物

は簡素な素掘りである。

**ピット** 柱穴は居跡中央に1本柱のみ検出されている。柱穴P 1は形状が円形で、径21×29cm、深さ11cmを測る。

**カマド** 北壁ほぼ中央に構築されている。壊乱が著しく遺存状況はあまり良くない。主軸方位は居跡と一致する。規模は長さ80cm、幅99cmで袖部は壁面に貼り付けら、灰白色砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を混入して造られている。燃焼部は径33×40cm、深さ9cmの楕円形に掘り窪められ、火床面は、燃焼部とほぼ一致する。奥壁は30°の角度で立ち上がり、煙道部へ移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅44cm、奥行51cmを測る。覆土は6層確認されているが、大半は構築材である2層粘土層で覆われ、煙道部に5層暗灰黄色土、および6層暗褐色土が堆積している。

**覆土** 2層が確認された。全体的に浅く床面覆土を覆っているのが2層褐色土、壁際に堆積しているのが1層黒褐色土である。いずれも多量のローム粒・ロームブロックを含み、埋め戻し土層である。

**遺物** (Fig.12) 土師器甕の破片が出土している。口縁部破片で内湾する体部から頸部は直角的に立ち上がり、口縁端部は短く摘み上げられる。口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。

**所見** 出土遺物は少なく土師器甕の小破片のみで、9世紀代と推定される。

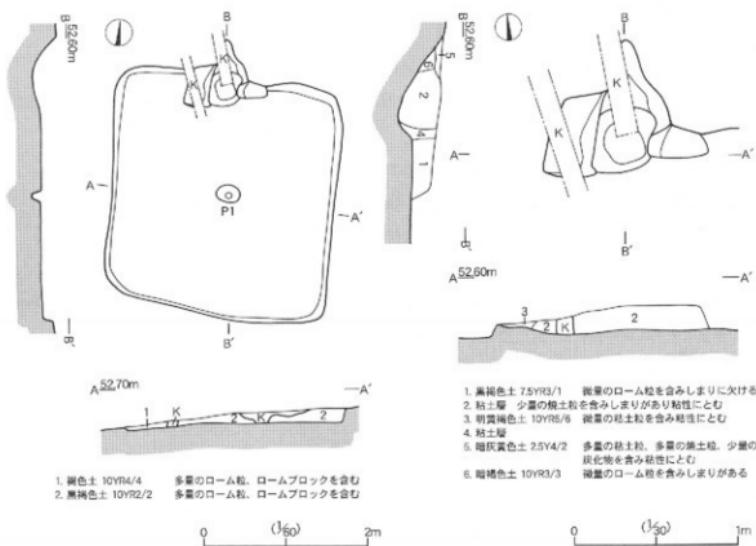


Fig.11 住居跡SI03実測図

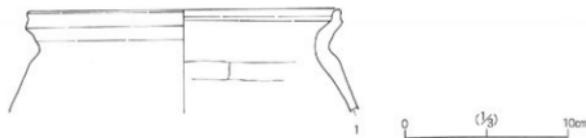


Fig.12 住居跡SI03出土遺物

#### 住居跡 S I 04 (Fig.13・14)

位置 調査区のA区西側。標高52.35～52.47mに位置する。

規模・構造 長軸3.20m、短軸2.66mで、西側壁面が中世溝SD 06によって切られている。平面形態は方形を呈するものと推定される。

主軸方位 北壁にカマドが設置されており、主軸はN-5°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは12～21cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床 貼床で、硬化面はカマド前面および床面中央付近が顕著であった。掘形は全面的に認められる。

ピット 柱穴は検出できなかった。

カマド 北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方位は住居跡と一致する。規模は長さ107cm、幅111cmで袖部は壁面に貼り付けら、灰白色砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を混入して造られている。燃焼部は径60×84cm、深さ6cmの楕円形に掘り窪められ、火床面は径36×40cmを測る。奥壁は23°の角度で立ち上がり、煙道部へ移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅70cm、奥行45cmを測る。覆土は搅乱が激しく土層を確認できなかった。

覆土 確認層は黒褐色土の單一層で、多量のローム粒と少量のロームブロックを含み、しまりがあり、粘性にとむ埋め戻し土層である。

遺物 (Fig.14) 土師器壺と須恵器壺および床面下から磨石が1点出土している。1は土師器壺で、ロクロ成形。体部下端は回転ヘラケズリによって面取りされ、底部は回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理を施している。2は須恵器壺で完形品である。ロクロ成形で、底部はヘラナデ。ヘラ記号が認められる。3は磨石の破片で、砂岩製である。扁平な円礫を使用し、現存長5.66cm、幅9.46cm、厚さ2.22cm、重さ159gを測る。磨耗痕は明瞭ではない。

所見 出土遺物である土師器壺および須恵器壺から判断して、9世紀後半と推定される。

#### 2. 溝状遺構 (SD) (Fig.15・18)

古代と推定される溝状遺構は2条検出されている。調査A区の東端で、南北に延びるSD 01と同じ調査区のほぼ中央を東西方向に走るSD 03である。いずれも遺物が出土しており、8世紀代に比定される。

#### 溝状遺構 SD 01 (Fig.15・18)

位置 調査区の東端で、北側から南側へ直線的に走り、南北両端はいずれも未調査区域に延びている。標高は52.16～52.76mで、北側が高く、南側が低く、その比高差は46cmを測る。

規模・構造 確認されている長さ23.20mで、幅70～140cm、深さ34～50cmで、逆台形に掘り込まれている。

主軸方位 主軸はN-3°-Wを示す。

壁 外傾しながら直線的に立ち上がる。

底面 やや鍋底状で丸みをもつ。明確な硬化面は確認できなかった。

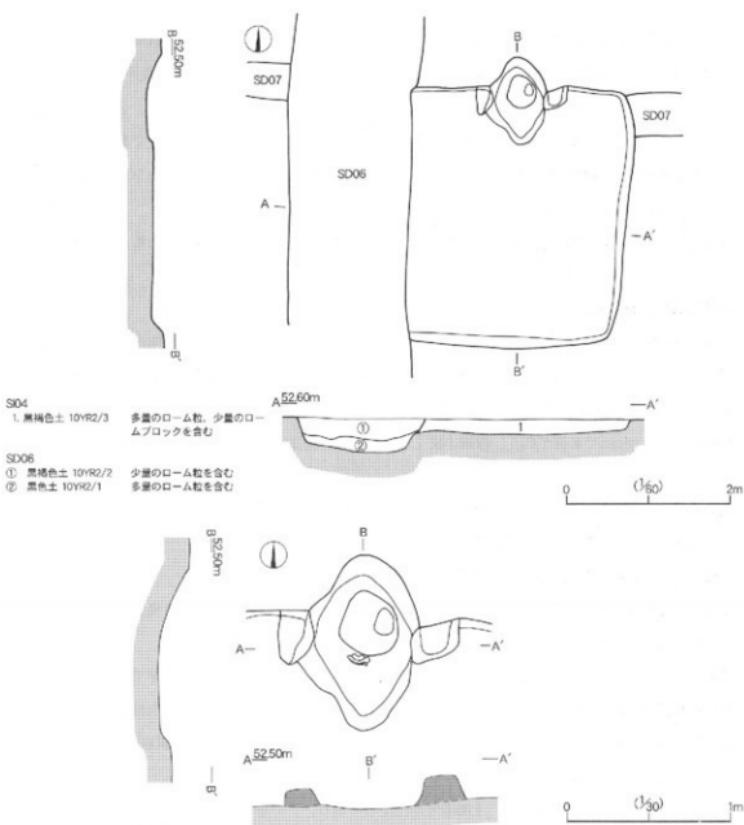


Fig.13 住居跡SI04実測図

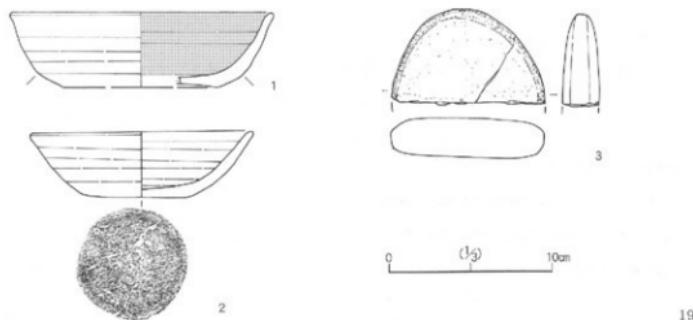


Fig.14 住居跡SI04出土遺物

**覆土** 黒褐色土の單一層で、少量のローム粒を含み、しまりがあり、粘性にとむ。自然堆積層である。

**遺物** (Fig.18) 須恵器高台付坏、砥石が出土している。1は須恵器高台付坏の底部破片で、ロクロ成形。高台は「ハ」の字状に開き、体部は下端で屈曲し、ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。2は結晶片岩製の砥石の破片である。現状は扁平で台形状を呈し、表面は使用が激しくよく磨耗し平滑である。また上側面と左側面も研磨痕が明瞭である。なお左側面には刃先の擦痕が認められる。長さ11.50cm、幅4.45cm、厚さ1.65cm、重さ97gを測る。

**所見** 覆土中から須恵器高台付坏が出土しており、この遺物から判断して、9世紀前葉と推定される。

#### 溝状遺構 S D 03 (Fig.15・18)

**位置** 調査区の中央を東西に横断する溝で、東側から西側へほぼ直線的に走り、西端が未調査区域に延びている。標高は52.16～52.76mで、東側が高く、西側が低く、その比高差は73cmを測る。

**規模・構造** 西側が未調査区域に入るため、全容を把握できないが、確認されている長さ53mである。また幅40～125cmで東側が広く、西側が狭くなっている。深さ22～34cmで、逆台形に掘り込まれている。

**主軸方位** 主軸はN-62°-Eを示す。

**壁** 外傾しながら直線的に立ち上がる。

**底面** 平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。

**覆土** 2層確認されている。上層の黒褐色土は少量のローム粒を含み、下層の2層褐色土は多量のローム粒・ロームブロックを含み、自然堆積層である。

**遺物** (Fig.18) 須恵器坏、土師器坏、須恵器變破片が出土している。3は須恵器坏で、ロクロ成形。口径に対し器高が低い。底部回転ヘラケズリ。4は土師器坏。平底の底部から体部は内湾気味に開き、口縁部は短く直立する。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。5は須恵器大甕の胴部破片。外面タタキによる調整。

**所見** 覆土中から出土の須恵器坏、土師器坏が出土しており、この遺物から判断して、8世紀代と推定される。

#### 3. 土坑 (SK) (Fig.16～18)

円形を基本に、長方形土坑が検出された。遺物は土坑SK07のみ出土しているが、他は図示できるものは検出されていない。覆土の状況から判断して8～9世紀代に属するものとした。

##### 土坑 SK01 (Fig.16)

**位置** 調査区A区の北東側。標高52.75～52.83mに位置する。

**規模・構造** 長幅1.24m、短軸1.23mで、平面形態は円形を呈する。

**断面形** 円筒形

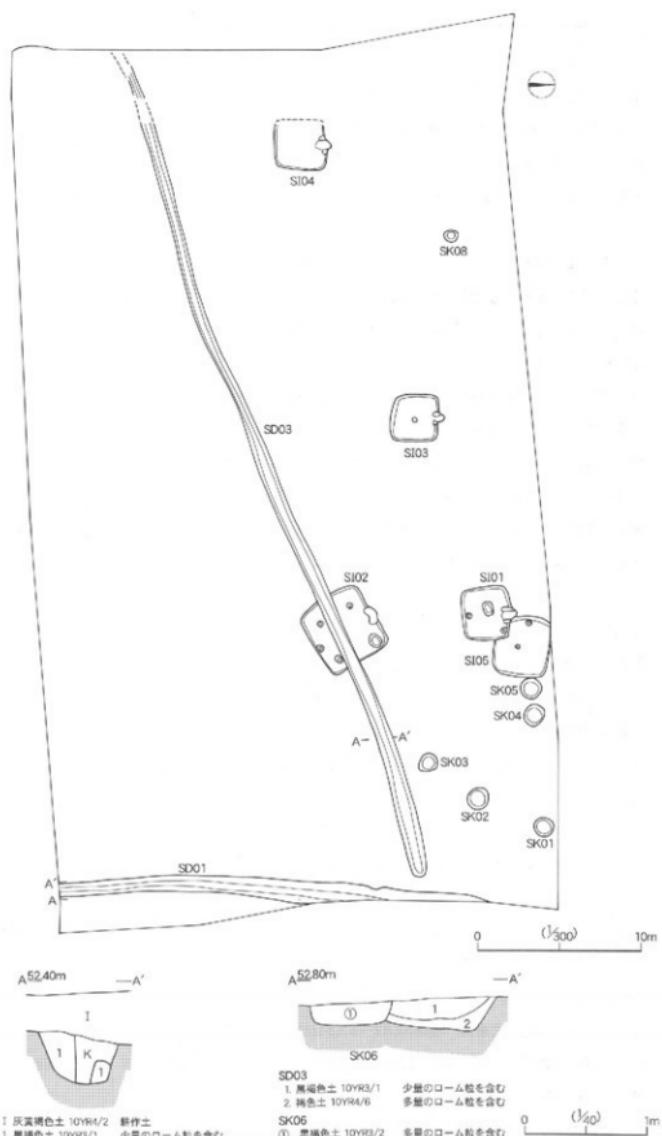


Fig.15 溝状遺構SD01、03実測図

**壁** 確認面からの深さは35cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

**底面** 平坦で、直床である。

**覆土** 2層に分層できる。覆土の大半を覆っているのが、1層黒褐色土で、少量のローム粒を含み、底面に接している2層褐色土は多量のローム粒を含む。

**遺物** 土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

**所見** 8～9世紀代と推定する。

#### 土坑SK02 (Fig.16)

**位置** 調査区A区の北東側。標高52.76～52.80mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.30m、短軸1.30mで、平面形態は円形を呈する。

**断面形** 円筒形

**壁** 確認面からの深さは57cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

**底面** 平坦で、直床である。

**覆土** 3層に分層できる。覆土の大半を覆っているのが、1層黒褐色土で、少量のローム粒を含み、底面に接している3層褐色土は多量のローム粒を含む。

**遺物** 土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

**所見** 8～9世紀代と推定する。

#### 土坑SK03 (Fig.16)

**位置** 調査区A区の北東側。標高52.72～52.78mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.16m、短軸1.11mで、平面形態は円形を呈する。

**断面形** 円筒形

**壁** 確認面からの深さは30cmを測り、大半は垂直気味に立ち上がるが、部分的に外傾する。

**底面** 平坦で、直床である。

**覆土** 2層に分層できる。覆土の大半を覆っているのが、2層褐色土で、微量のローム粒を含み、壁際に接している1層褐色土は多量のローム粒を含む。

**遺物** 土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

**所見** 8～9世紀代と推定する。

#### 土坑SK04 (Fig.16)

**位置** 調査区A区の北東側。標高52.82～52.84mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.31m、短軸1.21mで、平面形態は円形を呈する。

**断面形** 円筒形

**壁** 確認面からの深さは47cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

**底面** 平坦で、直床である。

**覆土** 4層に分層できる。覆土の上層を覆っているのが、1層黒褐色土で、微量のローム粒を含み、中層の2層黒褐色土は少量のローム粒を含み、壁際に接している3層黄褐色土は多量のローム粒を含み、底面に接している4層褐色土は多量のローム粒を含む。

**遺物** 土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

**所見** 8～9世紀代と推定する。

#### 土坑SK05 (Fig.16)

**位置** 調査区A区の北東側。標高52.74～52.80mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.28m、短軸1.26mで、平面形態は円形を呈する。

**断面形** 円筒形

**壁** 確認面からの深さは31cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

**底面** 平坦で、直床である。

**覆土** 2層に分層できる。覆土の大半を覆っているのが、1層黒褐色土で、微量のローム粒を含み、底面に接している2層暗褐色土は少量のローム粒を含む。

**遺物** 土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

**所見** 8～9世紀代と推定する。

#### 土坑SK07 (Fig.16・18)

**位置** 調査区A区の北側。標高52.54～52.56mに位置する。住居跡S101のほぼ中央に構築されている。

**規模・構造** 長軸0.82m、短軸0.66mで、平面形態は横円形を呈する。

**断面形** 円筒形

**壁** 確認面からの深さは11cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

**底面** 平坦で、直床である。

**覆土** 黒褐色土の単一層である。少量のローム粒を含む。

**遺物** (Fig.18) 土師器甕の口縁部破片が出土している。体部は内湾気味に立ち上がり、頸部は緩く屈曲し、口縁部は外反し、端部で摘み上げられる。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。

**所見** 出土遺物から判断して9世紀代と推定する。

#### 土坑SK08 (Fig.17)

**位置** 調査区A区北西側。標高52.62mに位置する。

**規模・構造** 長軸0.80m、短軸0.78mで、平面形態は円形を呈する。

**断面形** 半円形

**壁** 確認面からの深さは29cmを測り、ほぼ鍋底状に開く。

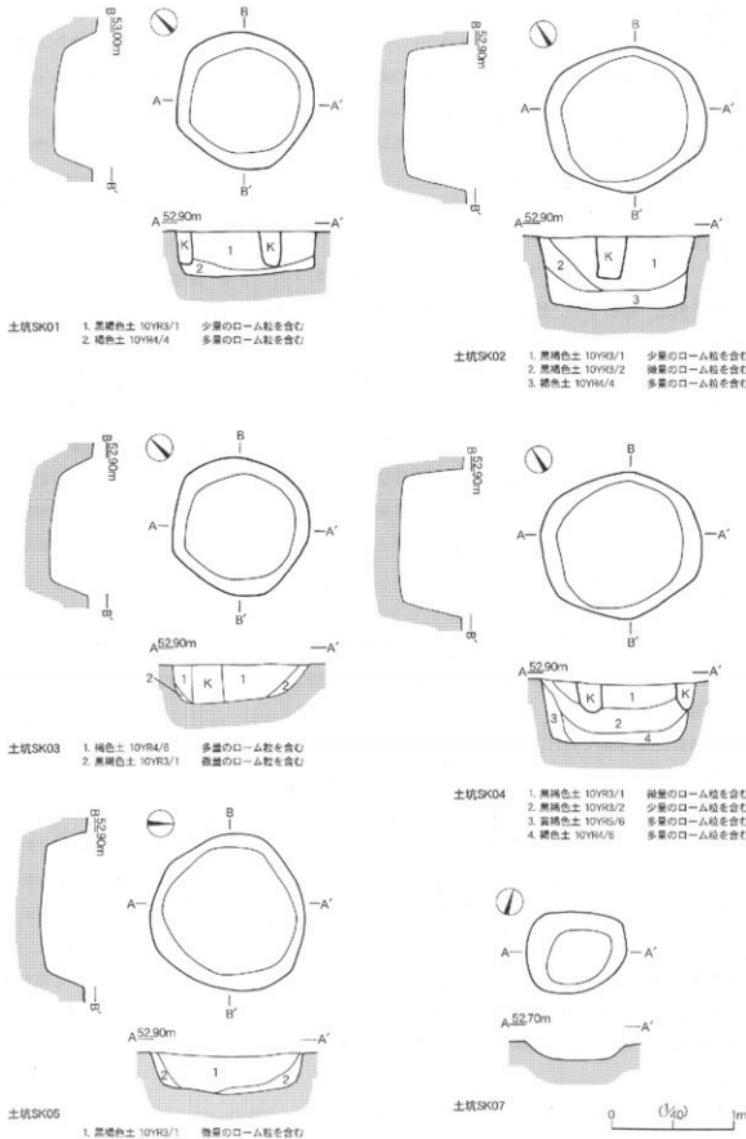


Fig.16 土坑SK01、02、03、04、05、07実測図

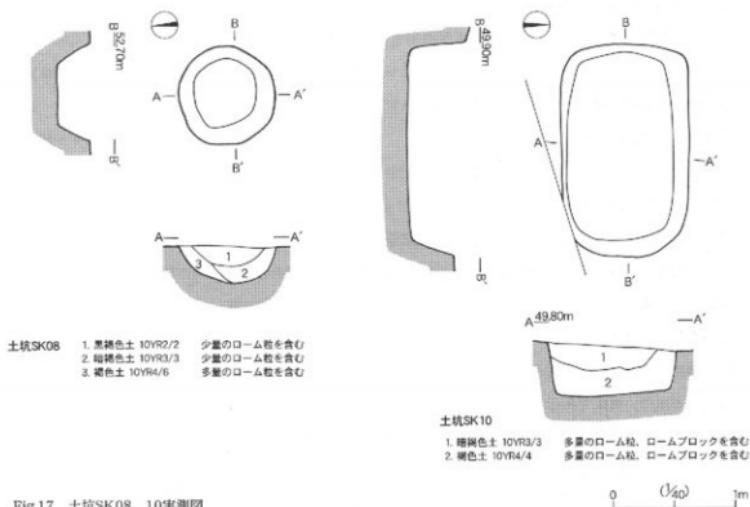


Fig.17 土坑SK08, 10実測図

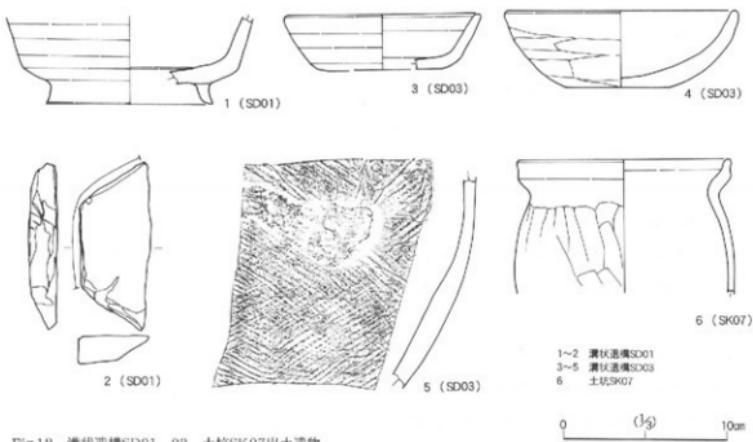


Fig.18 潜状遺構SD01, 03 土坑SK07出土遺物

**底面** 鋼底状を呈し、直床である。

**覆土** 3層に分層できる。覆土上層は1層黒褐色土で、少量のローム粒を含み、底面に接している2層暗褐色土は少量のローム粒を含む。壁際に接している3層褐色土は多量のローム粒を含む。

**遺物** 土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

**所見** 8～9世紀代と推定する。

#### 土坑SK10 (Fig.17)

**位置** 調査区B区。標高49.56～49.78mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.75m、短軸1.05mで、平面形態は隅丸長方形を呈する。

**断面形** 箱形

**主軸方位** 主軸はN-89°-Eを示す。

**壁** 確認面からの深さは40cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

**底面** 平坦で、直床である。

**覆土** 2層に分層できる。覆土の上層を覆っているのが、1層暗褐色土で、多量のローム粒・ロームブロックを含み、底面に接し覆土の大半を覆っている2層褐色土は多量のローム粒・ロームブロックを含む。埋戻し土層である。

**遺物** 土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

**所見** 8～9世紀代と推定する。

### 第5節 中世 (Fig.6・7)

#### 1. 概要 (Fig.6・7)

中世と推定される堅穴状遺構2基と溝状遺構条が検出されている。堅穴状遺構2基はいずれも未調査区域に広がり全貌を把握できていない。方形系の遺構であり、また溝状遺構は調査A区において西端と南端で検出され、調査区B区では西側および南側を区画する方形区画溝が確認された。

#### 2. 溝状遺構 (SD) (Fig.19・20・24・25)

中世と推定される溝状遺構は3条検出されている。調査区A区において西端と南端で検出され、調査区B区では西側および南側を区画する方形区画溝が確認された。

#### 溝状遺構SD06 (Fig.16・24)

**位置** 調査A区の西端で、北側から南側へ直線的に走り、南北両端はいずれも未調査区域に延びている。標高は51.92～52.60mで、北側が高く、南側が低く、その比高差はわずかに7cmを測るのみであるが、上層の確認面の比高差は53cmある。

**規模・構造** 確認されている長さ30.30mで、幅115~170cm、深さ22~75cmで、逆台形に掘り込まれている。

**主軸方位** 主軸はN-4°-Wを示す。

**壁** 外傾しながら直線的に立ち上がる。

**底面** 平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。

**覆土** 5層確認されている。上層の1層黒褐色土は微量のローム粒を含み、中層の2層黒褐色土は少量のローム粒を含み、下層の4・5は黒色で、ローム粒を含み、いずれも自然堆積層である。

**遺物** (Fig.24) 覆土中より遺物が出土している。貿易磁器である中国産白磁小皿の底部破片がある。削り出し高台をもつ。また鉄片の破片が出土している。扁平な棒状を呈し、先端部が直角に折り曲げている。現存長3.88cm、幅1.24cm、厚さ0.59cmを測る。

**所見** 覆土中より中国産の白磁小皿が出土している。15世紀代と推定される。

#### 溝状遺構S D 08 (Fig.19・24・25)

**位置** 調査A区の南西側を東西に走る溝で、東側から西側へほぼ直線的に走り、西端が未調査区域に延びている。標高は51.81~52.15mで、東側が高く、西側が低く、その比高差は21cmを測る。

**規模・構造** 西側が未調査区域に入るため、全容を把握できないが、確認されている長さ22.30mである。また幅135~180cmで東側が狭く、西側が広くなっている。深さ28~90cmで、逆台形に掘り込まれている。

**主軸方位** 主軸はN-88°-Wを示す。

**壁** 外傾しながら直線的に立ち上がる。

**底面** 平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。

**覆土** 2層確認されている。上層の黒色土は少量のローム粒を含み、下層の2層黒褐色土は少量のローム粒を含み、自然堆積層である。

**遺物** (Fig.24・25) 覆土中より比較的まとまりある遺物が出土している。瀬戸美濃系陶器、土師質土器である。瀬戸美濃系は平碗・茶壺、さらに志戸呂系擂鉢と内耳土鍋である。4・5は比較的大きな破片で、僅かに接合する資料により復元実測した。外面には鉄釉がかかり、比較的大きな茶壺である。古瀬戸後期。15世紀代。7は志戸呂系擂鉢で、見込みの櫛目は7本単位で、櫛目単位は間隔をあけ施す。8・9は土師質土器の内耳土鍋である。また鉄製品として10刀子の破片がある。刃部と茎部の一部のみで銹化が著しく正確な計測は不可能であるが、刃部は切先部が、茎部は茎尻部が欠損している。現存長さ5.51cm、刃部幅1.37cm、背厚0.26cm、茎幅1.24cm、茎厚0.40cmを測る。その他石製品として凝灰岩製の砥石がある。方柱状を呈し、下端部が欠損している。磨耗面は表裏面および側面の4面と先端面の計5面すべてに認められ、使用頻度が著しいことがわかる。現存長9.22cm、幅2.61cm、厚さ1.94cm、重さ73gを測る。またFig.25-1は粘板岩製の櫛である。先端部の欠損後、裏面を削り直し再利用している。略楕円形を呈し、現存長10.40cm、幅

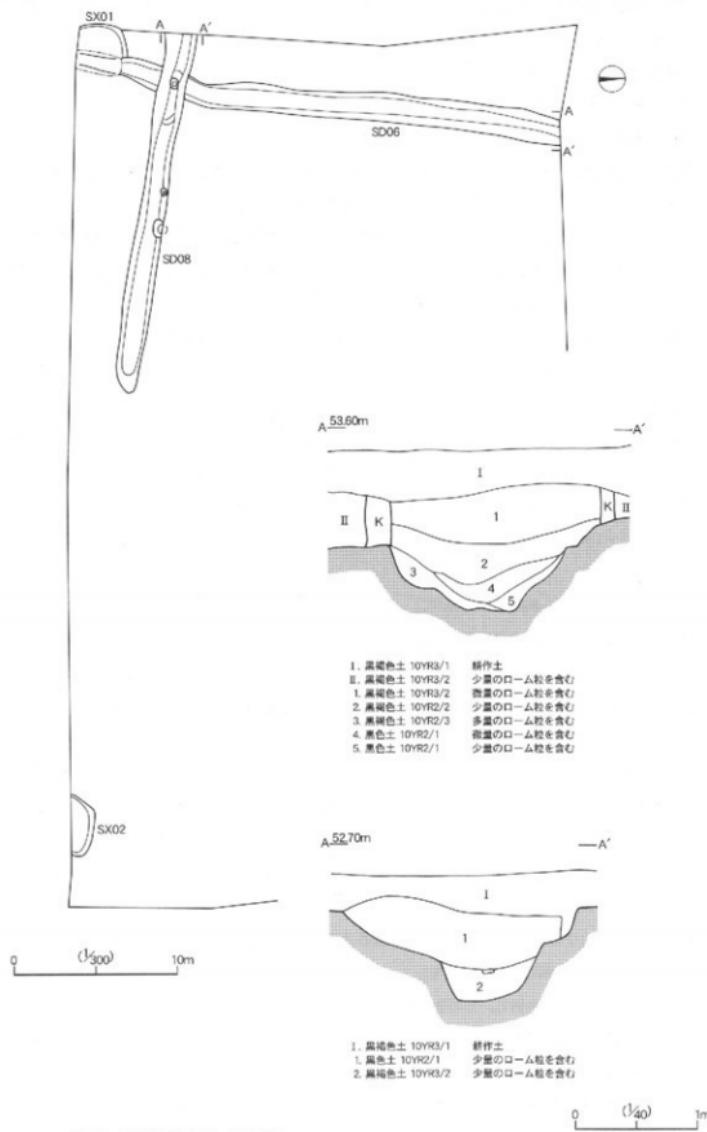


Fig.19 溝状造構SD06, 08実測図

9.66cm、厚さ1.70cm、重さ261gを測る。器厚が薄くなる「海」の部分で折損している。扁平の円形素材石を研磨し、その中央付近に観面を作り出す。現存長8.47cm、幅4.93cmの長方観面を掘削し、周縁平坦面に先端の細い刀子状工具により鱗状の青海波紋を充填させる。観面の陸部は丁寧に研磨されている。この海部が折損したため、裏面（観陰）の中央部にやや小さな観部を作り出す。長さ6.85cm、幅4.60cmの長方形に刻み、「海」部長さ1.40cm、深さ0.71cm。「陸」部長さ5.45cm、深さ0.07cmと非常に浅い。やはり丁寧に使用している。なお、溝中央西側からモロコシ（トウキビ）と思われる径5cm前後の炭化物の塊りが出土している。ちょうどおむすび状を呈していた。

**所見** 漢戸美濃系陶器を主体にまとまりある遺物が検出されている。平碗および茶壺は古漢戸後期に比定され15世紀代。志戸呂系壺鉢も古漢戸後期に併行されており、15世紀前後に使用していたものと推定される。

#### 溝状遺構 S D09 (Fig.20・25)

**位置** 調査B区のほぼ中央で、西端部の北側から南側へ直線的に下り、ここから直角に東側に屈曲し、東西方向に走る。北端と東端はいずれも未調査区域に延びている。標高は49.63～50.07mで、北側が高く、東側が低く、その比高差は7cmを測り、上層の確認面の比高差は44cmある。

**規模・構造** 確認されている長さは延長31.20mで、幅100～165cm、深さ36～70cmで、逆台形に掘り込まれている。

**主軸方位** 主軸方位は南北軸がN-4°-E。東西軸はN-77°-Eを示す。

**壁** 外傾しながら直線的に立ち上がる。

**底面** 平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。

**覆土** 6層確認されている。上層の2層褐色土は多量のローム粒を含み、1層黄褐色土は多量のローム粒・ロームブロックを含む。中層の3層暗褐色土は少量のローム粒を含み、4層黄褐色土は多量のローム粒を含む。下層の5・6は黄褐色土で、多量のローム粒を含み、いずれも自然堆積層である。

**遺物** (Fig.25) 覆土中より比較的まとまりある遺物が出土している。とくに土師質土器の内耳土鍋は小破片が多いがまとまっている。また錢貨が2枚出土している。図示したのは内耳土鍋のうち耳部が遺存している5点と底部破片2点である。成形や胎土がそれぞれ酷似していることからほぼ同時期の製作と推定される。その他錢貨が2枚出土している。いずれも中国銭である。11は唐銭「開元通寶（南唐、960年）」である。長さ2.49cm、厚さ0.15cm、重さ2.30gを測る。12も銅銭であるが、4片に割れ、判読不明である。長さ2.48cm、厚さ0.13cm、重さ1.64gを測る。なお、西側溝の南側で土坑SK12に接する地点で、馬と思われる骨が出土している。粉末化し同定鑑定は不可能であるが、調査時の見解で馬と判断した。

**所見** 内耳土鍋が比較的多く出土し、併せて中国銭である「開元通寶」が検出されていることから、15世紀前後に使用していたものと推定される。

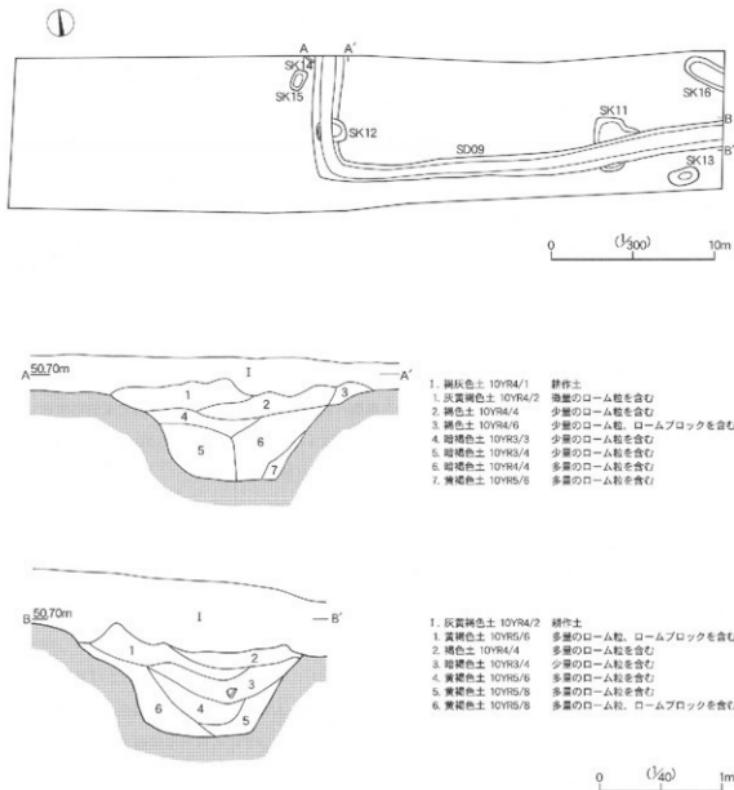


Fig.20 溝状遺構SD09実測図

### 3. 土坑

土坑SK11 (Fig.151)

位置 調査区B区。標高49.89~50.08mに位置する。

規模・構造 長軸3.05m、短軸1.90mで、平面形態は長方形を呈する。

断面形 箱形

主軸方位 主軸はN-9°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは44cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

底面 平坦で、直床である。

覆土 2層に分層できる。覆土の上層を覆っているのが、1層暗褐色土で、多量のローム粒・ロームブロックを含み、底面に接し覆土の大半を覆っている2層褐色土は多量のローム粒・ロームブロックを含む。

遺物 遺物の出土はない。

所見 時期を決定付ける遺物の出土はないが、覆土の状況からみて中世15世紀前後と推定される。

土坑SK12 (Fig.21)

位置 調査区B区。標高49.90~50.03mに位置する。溝状遺構SD09によって切られている。

規模・構造 長軸1.55m、短軸1.30mで、平面形態は隅丸長方形を呈する。

断面形 箱形

主軸方位 主軸はN-73°-Eを示す。

壁 確認面からの深さは50cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

底面 平坦で、直床である。

覆土 大半が溝状遺構SD09によって切られ、土層確認が困難であった。

遺物 遺物の出土はない。

所見 時期を決定付ける遺物の出土はないが、覆土の状況からみて中世15世紀前後と推定される。

土坑SK13 (Fig.21・25)

位置 調査区B区。標高49.56~49.60mに位置する。

規模・構造 長径2.00m、短径1.41mで、平面形態は楕円形を呈する。

断面形 半円形

主軸方位 主軸はN-80°-Eを示す。

壁 確認面からの深さは47cmを測り、外傾して開く。

底面 鍋底状で、直床である。

覆土 3層に分層できる。覆土の上層を覆っているのが、1層暗褐色土で、少量のローム粒を含み、底面に接し覆土の大半を覆っている2層黒褐色土は少量のローム粒を含み、壁際から底面に接している3層黒褐色土も少量のローム粒を含む。

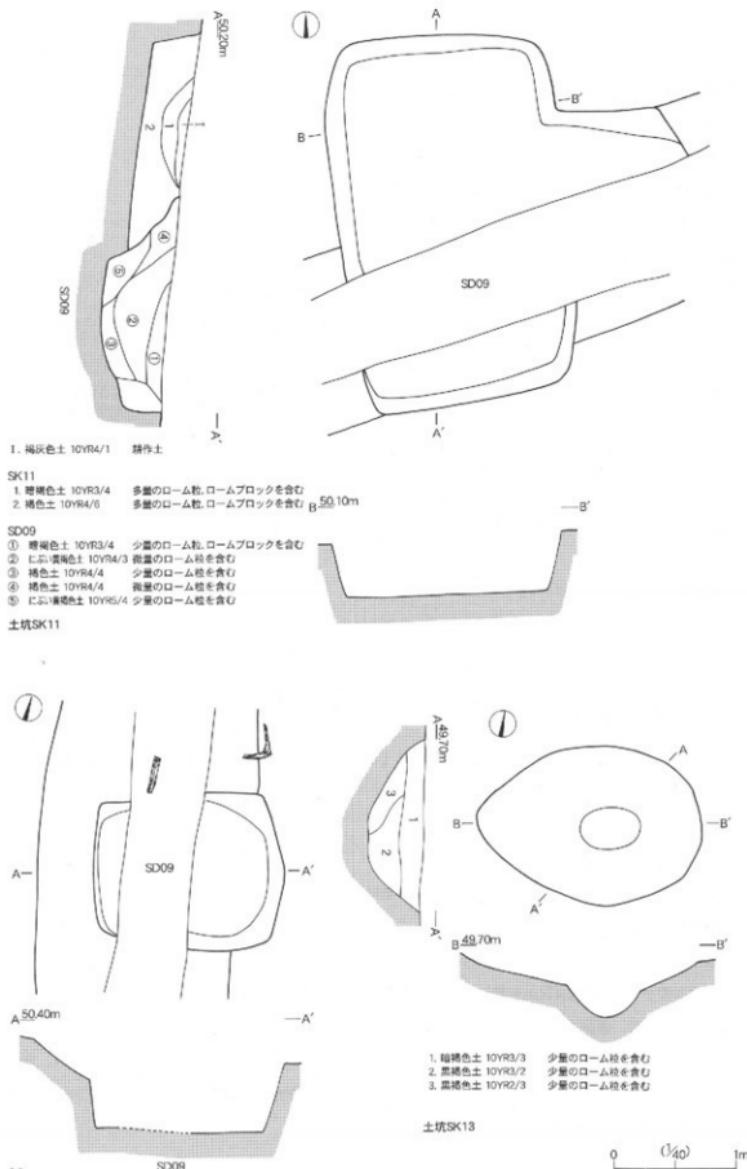


Fig.21 土坑SK11、12、13実測図

**遺物** 遺物の出土はない。

**所見** 時期を決定付ける遺物の出土はないが、覆土の状況からみて中世15世紀前後と推定される。

#### 土坑SK14 (Fig.22)

**位置** 調査区B区。標高50.57mに位置する。北側の大半が未調査区域に広がっている。

**規模・構造** 確認できる長軸0.50m、短軸0.28mで、平面形態は長方形を呈するものと推定できる。

**断面形** 箱形

**主軸方位** 主軸はN-73°-Wを示す。

**壁** 確認面からの深さは49cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

**底面** 平坦で、直床である。

**覆土** 2層に分層できる。覆土の上層を覆っているのが、1層にぶい黄褐色土で、多量のローム粒を含み、底面に接している2層褐色土は多量のローム粒を含む。

**遺物** 遺物の出土はない。

**所見** 時期を決定付ける遺物の出土はないが、覆土の状況からみて中世15世紀前後と推定される。

#### 土坑SK15 (Fig.22)

**位置** 調査区B区。標高50.35～50.54mに位置する。

**規模・構造** 長軸1.18m、短軸0.84mで、平面形態は隅丸方形を呈する。

**断面形** 逆台形

**主軸方位** 主軸はN-80°-Eを示す。

**壁** 確認面からの深さは50cmを測り、外傾して立ち上がる。

**底面** 平坦で、直床である。

**遺物** 遺物の出土はない。

**所見** 時期を決定付ける遺物の出土はないが、覆土の状況からみて中世15世紀前後と推定される。

#### 土坑SK16 (Fig.22)

**位置** 調査区B区。標高50.20～50.40mに位置する。

**規模・構造** 長軸2.54m、短軸1.29mで、平面形態は長方形を呈する。

**断面形** 箱形

**主軸方位** 主軸はN-77°-Wを示す。

**壁** 確認面からの深さは42cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

**底面** 平坦で、直床である。

**覆土** 3層に分層できる。覆土の上層を覆っているのが、2層褐色土で、多量のローム粒・ロームブロックを含み、底面に接し覆土の大半を覆っている1層褐色土も多量のローム粒・ロームブロックを含み、同

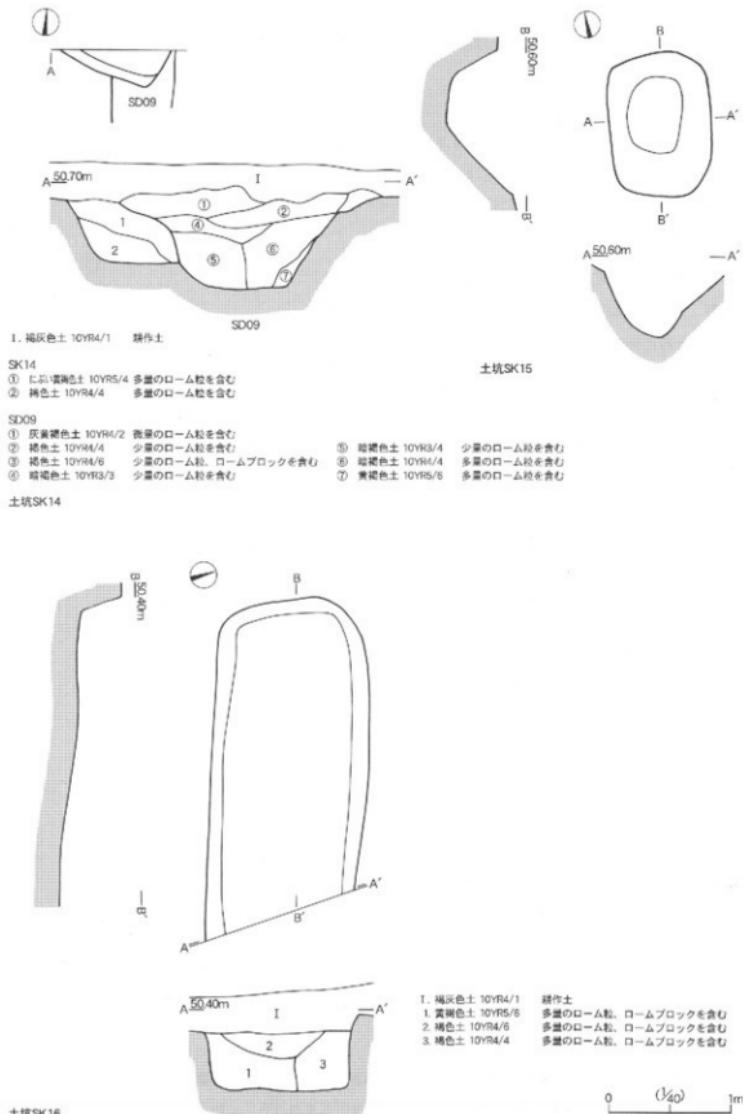


Fig.22 土坑SK14, 15, 16実測図

じく底面に接している3層黄褐色土も多量のローム粒・ロームブロックを含む。

**遺物** 遺物の出土はない。

**所見** 時期を決定付ける遺物の出土はないが、覆土の状況からみて中世15世紀前後と推定される。

#### 4. 穫穴状遺構 (Fig.23・24)

##### 竪穴状遺構 S X01 (Fig.23・24)

**位置** 調査区A区南西側。標高52.02mに位置する。

**規模・構造** 東側は溝S D06によって切られ、南側は未調査区域に広がる。したがって現存長軸3.02m、短軸1.40mで、平面形態は隅丸方形を呈するものと推定する。

**主軸方位** 長軸を主軸とするとN-3°-Eを示す。

**壁** 確認面からの深さは45cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、直床である。

**付帯施設** 特に無し。

**覆土** 2層が確認された。いずれも自然堆積土層である。上層である1層黒褐色土は微量のローム粒を含む。床面に接する2層黒褐色土は少量のローム粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。

**遺物** 覆土中より瀬戸美濃の深皿類が1点出土している。底部破片であるが、底径15cmを測る。

**所見** 隅丸方形を呈する竪穴状遺構で、半分以上は擾乱を受けているが、覆土中の出土遺物から判断して、古瀬戸後期で15世紀と推定される。

##### 竪穴状遺構 S X02 (Fig.23)

**位置** 調査区A区の南東側。標高51.86mに位置する。

**規模・構造** 南側半分以上は未調査区域に広がる。したがって確認できる現存長軸3.70m、短軸1.30mで、平面形態は隅丸方形を呈するものと推定する。

**主軸方位** 長軸を主軸とするとN-75°-Eを示す。

**壁** 確認面からの深さは47cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、直床である。

**付帯施設** 特に無し。

**覆土** 3層が確認されているが、1層は耕作土層で、2・3層が覆土である。いずれも自然堆積土層で、上層である2層黒褐色土は多量のローム粒を含む。床面に接する3層褐色土は少量のローム粒・ロームブロックを含む。しまりに欠ける。

**遺物** 検出できなかった。

**所見** 隅丸方形を呈する竪穴状遺構で、半分以上は擾乱を受けているが、覆土の状態から判断して、中世と推定される。

(小川 和博)

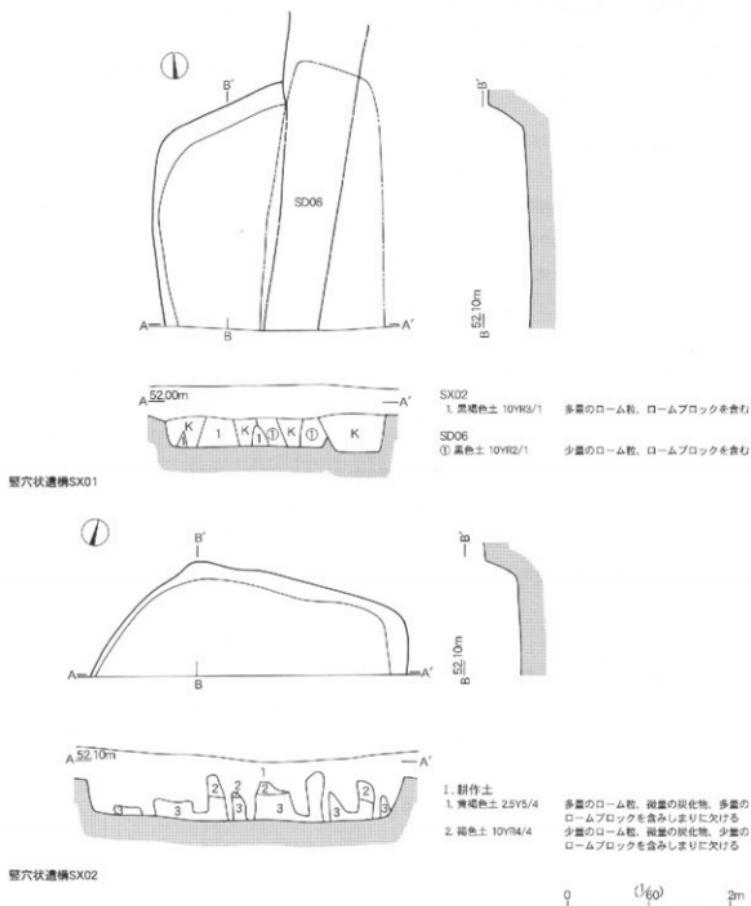


Fig.23 壁穴状遺構SX01、02実測図

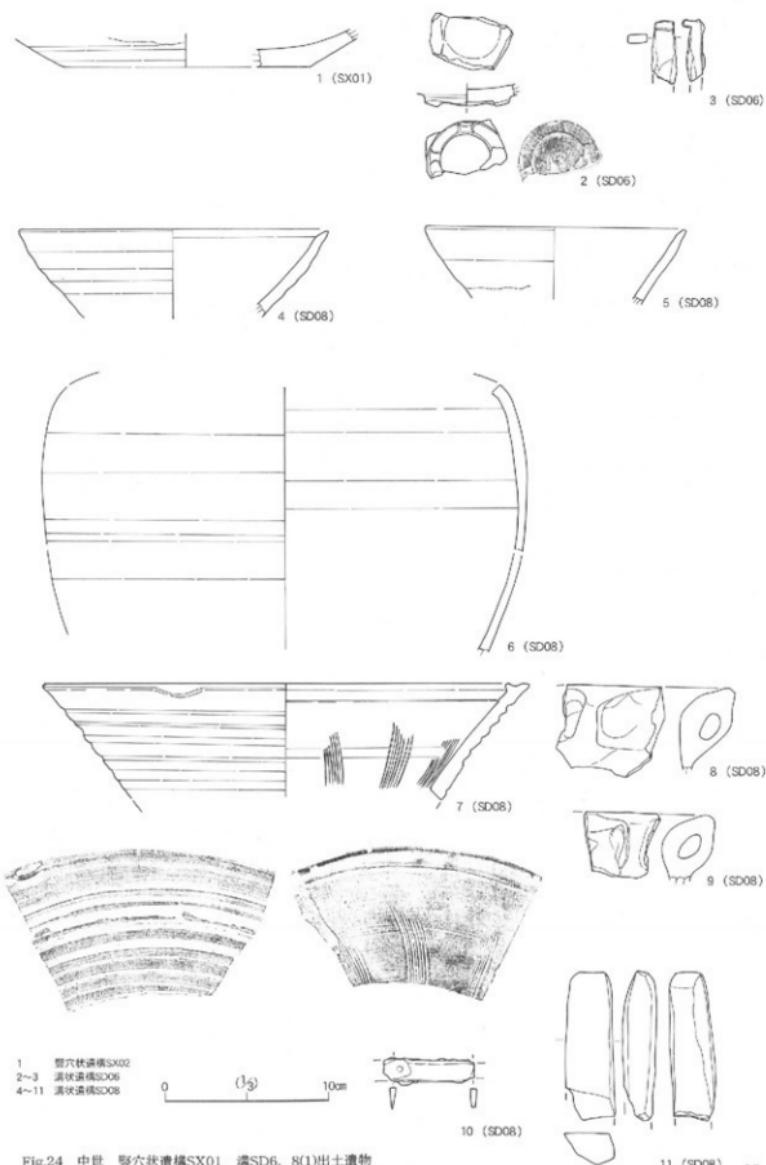
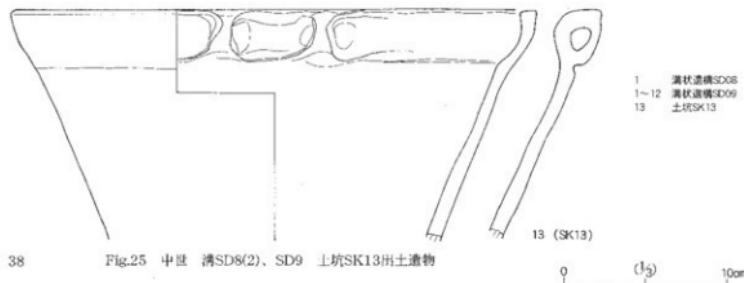
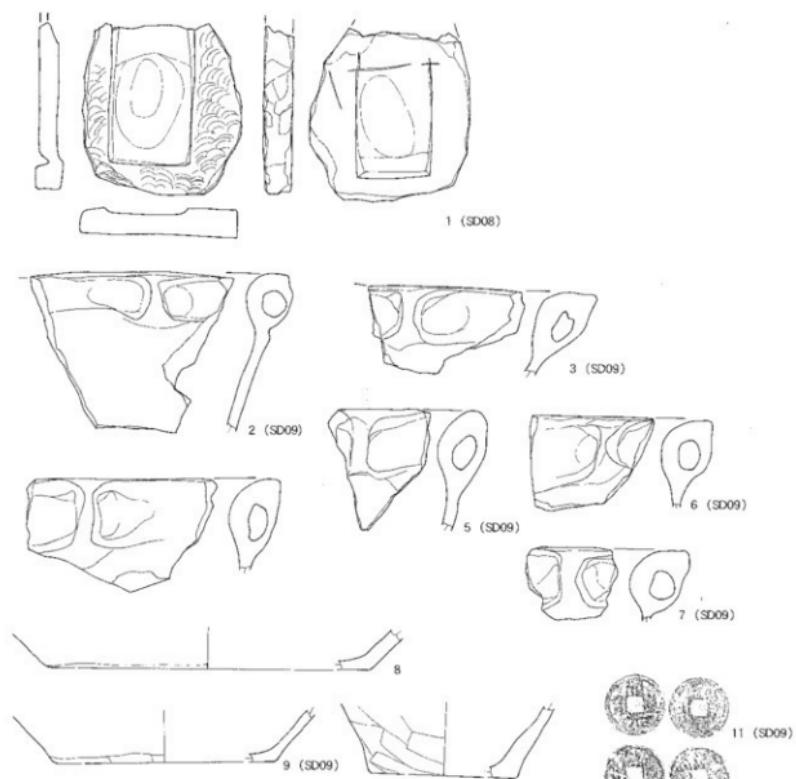


Fig.24 中世 脊穴状遺構SX01 溝SD6、8(1)出土遺物



### 第Ⅲ章　まとめ

本遺跡の中心は古代および中世であるが、その中に縄文時代、弥生時代が含まれている。縄文時代は中期のみで、全体の遺物量が少ないものの、住居跡と思われる遺構の検出がある。方形を呈し、炉の設置は確認できなかった。ここから深鉢の胴下半部の破片が出土した。明瞭な文様を確認できず、ヘラによる整形痕のみの土器である。僅かに残存する底部には縄文底が認められ、明らかに中期中葉から後半にかけたものであることが判明している。周辺からも小破片であるが阿玉台式、大木8b式、加曾利E1～3式土器が出土している。これらから判断すると大木8b式古期段階に相当するものと推定される。

弥生時代は上器が僅かに2点のみという微量であり、集落の存在は確認できず、主体となることはなかった。時期は後期中葉と推定される。

古代に相当する奈良・平安時代は、堅穴住居跡4軒が検出された。住居跡群は調査区A区の北側に集中することから本来の集落は未調査区域である北側の台地平坦面にその中心を置くものと推定される。なお、全体的に出土遺物は少なく、なかなか時期決定の判断を困難しているが、時期は概ね8世紀代と9世紀代に分離することが可能である。まず奈良時代である8世紀代は住居跡S102の1軒だけであるが、本跡はカマドを北壁中央に設置し、4本柱構造の住居である。しかもカマド東側に貯蔵穴を有する。また平安時代の9世紀に位置付けられる住居跡は3軒で、後半に位置付けられる。S101・03・04やはりカマドを北壁中央に設置するが、明瞭な主柱穴をもたない住居である。しかもS11以外には南壁際中央入口部に梯子穴の設置が確認できない。これら3軒の住居の主軸方位はほぼ同一で、遺物の出土量は極端に少ないと同時期と判断した。

中世の遺構については、溝と土坑が検出された。とくに溝から出土した遺物は断片的なものにも関わらず、その内容は豊富で重要である。溝SD8からは瀬戸美濃系の平碗、茶壺、志戸呂の擂鉢、内耳土鍋のほか図示していないが常滑も出土していた。なかでも窯は特筆される。これは西側に展開する「宇留野城跡」との密接なかかわりがあることはいうまでもない。当城跡の概要については既に第4節で触れたとおりであるが、中城と外城に挟まれた堀の延長がここ本遺跡の南側にあたり、いわゆる「外堀」の一角に形成されたものである。さらに調査区B区で検出された溝SD9は中世における本遺跡の西辺から南辺を明瞭に区画する区画溝であるが、南辺がちょうど外堀に並行して走っている。調査区A区を含めた区画内には明瞭な城跡とのかかわる井戸等の生活関連遺構をはじめとする建物跡等の遺構の検出はなかったが、陶磁器瓶や内耳土鍋、さらに鏡の出土は宇留野城主郭部との直接的で、同時存在した有機的な関係があったことを示唆している。遺構の検出は少なかったが、出土遺物を含め今後の研究の進展によっては、宇留野城跡と本遺跡の関わりと性格がさらに解明されることとなるであろう。

(小川 和博)

## 1. 出土土器観察表

SI-01 (Fig.8)

番号	器種	遺存度	重量(g)	器形の特徴	手造の特徴	出土・焼成	色調	備考
1	土師器 碗	体部1/2欠損	12.2 — 4.8 7.0	平底の底部から体部は外縁にて立ち上がり、口縁部底部は僅かに外反する。	ロクロ成形。外縁部下端部斜らへカズリ。内面ハラミガキの後、黒色処理	石英・長石粒を含む。 良好	褐色(7.5YR4/6) 内窓 9世紀後半	
2	土師器 皿	体部1/2欠損	12.2 — 1.9 4.6	やや丸い底氣味の底部から体部は外縁的に立ち上りく。	ロクロ成形。外縁部下端部斜らへカズリ。内面ハラミガキの後、黒色処理	石英・長石粒を含む。 良好	灰褐色(10YR5/4) 内窓 9世紀後半	
3	土師器 甕	体部1/2欠損	13.4 15.9 17.3 8.4	平底の底部から体部は内窓気味に立ち上がり、口縁部底部は僅かに内窓に立ち上りく。	ロクロ成形。外縁部下端部斜らへカズリ。内面ハラミガキの後、黒色処理	チャート・石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	灰褐色(7.5YR5/4) 内窓	
4	土師器 甕	体部1/2欠損	18.4 — 22.0 [16.0]	体部は内窓し、底部は内窓にて立ち上りがる。口縁部底部は僅かに内窓に立ち上りく。	ロクロ成形。ロコナデ。体部外周縁部斜らへカズリ。内面ハラミガキの後、黒色処理	石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	灰褐色(7.5YR5/3) 内窓	
5	土師器 甕	11縁部1/2 残存	15.0 — [12.2]	平底の底部から体部は内窓気味に立ち上りがる。口縁部底部は僅かに内窓に立ち上りく。	ロクロ成形。ロコナデ。体部外周縁部斜らへカズリ。内面ハラミガキの後、黒色処理	石英・長石粒・長石粒を含む。 良好	灰褐色(5YR6/4) 内窓	
6	土師器 甕	底部のみ残存	— [6.0] 8.4	平底の底部から体部は外縁にて立ち上りがる。	体部外周縁部斜らへカズリ。底部ハラナデ。内面ハラナデ。底面指ца。	石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	褐色(7.5YR6/6) 内窓	
7	唐津器 鉢	鉢部破片	—	鉢部剥落。	外縁タクタク調整。内面ハラナデ。	石英・長石粒を含む。 良好	褐灰色(10YR4/1) 内窓	

SI-02 (Fig.10)

番号	器種	遺存度	重量(g)	器形の特徴	手造の特徴	施工・焼成	色調	備考
1	土師器 环	口縁部5/6 残存	12.4 — 6.1 4.3	丸底の底部から体部は内窓気味に立ち、11縁部は外縁。	ロクロ成形。ロコナデ。体部外周縁部斜らへカズリ。内面ハラナデ	石英・長石粒・長石粒を含む。 良好	灰褐色(10YR5/4) 内窓	8世紀
2	土師器 环	体部1/6残存	12.4 — 6.1 4.3	丸底の底部から体部は内窓気味に立ち、口縁部底部は内窓気味に立ち上りく。	ロクロ成形。ロコナデ。体部外周縁部斜らへカズリ。内面ハラナデ	石英・長石粒を含む。 良好	灰褐色(10YR1/2) 内窓	8世紀
3	土師器 甕	直形残存	— (10.8) 11.2	やや丸い底氣味の底部から体部は内窓気味に立ち上りく。	外縁部および底部ハラカズリ。内面ハラナデ。	石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	灰褐色(10YR5/3) 内窓	
4	土師器 甕	底部残存	— (12.3) 11.0	平底の底部から体部は内窓気味に立ち上りがる。	外縁部および底部ハラカズリ。内面ハラナデ。	石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	灰褐色(10YR4/3) 内窓	

SI-03 (Fig.12)

番号	器種	遺存度	重量(g)	器形の特徴	手造の特徴	出土・焼成	色調	備考
1	土師器 甕	口縁部1/10 残存	19.0 — (6.0) —	体部は内窓し、底部は内窓気味に立ち上りがり、口縁部底部は内窓気味に立ち上りく。	ロクロ成形。体部外周縁部斜らへカズリ。底部ハラナデ。内面ハラミガキの後、黒色処理。	石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	灰褐色(10YR8/3) 内窓	

SI-04 (Fig.14)

番号	器種	遺存度	重量(g)	器形の特徴	手造の特徴	出土・焼成	色調	備考
1	土師器 甕	体部1/3残存	16.0 — 4.6 9.6	やや丸い底氣味の底部から体部下端は内窓気味に立ち上りがりされ、体部は外縁的に外縁にて立ち上りがる。	ロクロ成形。体部外周縁部斜らへカズリ。底部ハラナデ。内面ハラミガキの後、黒色処理。	石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	灰褐色(10YR7/4) 内窓	9世紀後半
2	須恵器 甕	完全品	13.6 — 4.0 6.5	平底の底部から体部は内窓気味に立ち上りがり、口縁部底部は内窓気味にて立ち上りする。	ロクロ成形。体部外周縁部斜らへカズリ。底部ハラナデ。内面ハラミガキの後、黒色処理。	石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	灰オーブン色(GYR6/2) 内窓	9世紀後半

SD01, 03-SK07 (Fig.18)

出土	回収番号	形 庫	法長(cm)	特徴の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
SD 1	土師器 环	直筒型 高台付环	(5.0) 10.0	「(1)」の半球の表面に 糸紋は唇部をして、縦き、 体部は外縫して立ち上 がる。	ロクロ成型、高台脚付け で、高台部側縫ナデ。	石系・黑色粒子・長石 粒を含む。 良好	暗灰色 (2.3YR5/2)	体部1/1内存 9世紀前半
SD 3	土師器 环	直筒型 「外」	12.0 — 3.4 8.0	口端に対し肩高が低い 唇部。半球唇部から 体部は外縫に外縫し て立ち上がる。	ロクロ成型、体部内外面 にクリアゲ、唇部内側へ ラグスリ。	白台脚状耳部、石系、 長石粒を含む。 良好	灰 (C4b/3)	外部1/4内存 8世紀
SD 3	土師器 環	直筒型 环	14.2 — 4.7 6.5	唇部を早し、平底の底 部から体部は内両気味 に立ち上がる。	「縫部ヨコナギ」。体部外 縫模様のヘラグスリ、底 部ヘラグスリ、内側体部 ヘラグスリ。	石系・黑色粒子・長石 粒を含む。 良好	淡黄褐色 (1.0YR8/3)	体部1/4内存 8世紀
SD 3	土師器 環	直筒型 环	— — —	脚部破片。	外側タタキ削巻、内面へ ラナデ。	石系・黑色粒子・長石 粒を含む。 良好	灰 (8YR5/1)	内外面自然物 が掛かってい る。
SK 7	土師器 环	直筒型 「外」	13.0 — (8.2) —	体部は内両気味に立ち 上がる。断面は切欠き、網 目し。口縫部唇部は内両 気味に梳み上げられる。	ロクロヨコナギ、体部外 縫模様のヘラグスリ、内 側体部のヘラナデ。	石系・灰石粒を含む。 良好	暗灰色 (1.0YR4/3)	口縫部1/10 残存

中世SX01-SD06, 08 (Fig.24-25)

出土	回収番号	形 庫	法長(cm)	特徴の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
SX 1	Fig.24-1	直筒型 深皿	— (LT) 15.0	半球の底盤から体部は 大きく外縫して圓す。	ロクロ焼き壺形。内外側 ナデ。	織密、浅褐。 石系、良石粒を含む	淡黄色 (2Y7/4)	古戸戸後期。 15世紀。 内面に灰釉斑 狀に付着 底部1/6残存
SD 6	Fig.24-2	口縫 皿	— (1.2) 4.8	附り出し高台をもつ。	ロクロ焼き壺形。	織密、灰白。	灰白色 (GY8/2)	B群、15世紀 代 底部のみ残存
SD 8	Fig.24-3	直筒型 平皿	19.0 — (5.3)	体部は内両気味に立ち 上がる。	ロクロ焼き壺形。内外面 に灰斑が掛かる。	織密、灰白。	オリーブ黄色 (7.5Y6/3)	古戸戸後期。 15世紀。 口縫部1/5残存
SD 8	Fig.24-5	直筒型 平皿	19.0 — (5.3)	体部はほぼ直線的に立 ち上がる。	ロクロ焼き壺形。内外面 に灰斑が掛かる。	織密、灰白。	オリーブ黄色 (7.5Y6/3)	古戸戸後期。 15世紀。 口縫部1/5残存
SD 8	Fig.24-6	直筒型 茶壺	— 29.80 (5.3)	体部は内縫して立ち上 がり、肩部でやや膨らむ。	ロクロ焼き壺形。外側に 輪錐が掛かる。	織密、灰オリーブ。 石系・良石粒を含む	にじい青褐色 (10YR1/3)	古戸戸後期。 15世紀。 体部1/4残存
SD 8	Fig.24-7	志戸口 壺	30.0 — (7.0)	体部は口縫線の对立 ち上がり、口縫部で内 側に縫をもつ。	ロクロ焼き壺形。内外側 に縫跡が掛かる。 7本巻位の縫目を層化 に開拓させ複数する。	織密、にじい青褐色 石系・良石粒を含む	青白 (7.5YR4/3)	古戸戸後期。 15世紀。 口縫部1/6残存
SD 8	Fig.24-8	土師質土器 内耳土壺	— — —	耳縫貼付け外側外面は突 出し、体部内両気味に 立ち上がる。	内外側口縫部横模様のヘ ラナデ。	白輪錐状耳部、石系、 良石粒を含む。 良好	淡褐色(10YR5/1) 黄褐色(7.5YR6/3)	10世紀 口縫部破片
SD 8	Fig.24-9	土師質土器 内耳土壺	— — —	耳縫貼付け外側外面は突 出し、体部内両気味に 立ち上がる。	内外側口縫部横模様のヘ ラナデ。	石系・良石粒を含む。 良好	淡褐色(2.5YR8/4)	10世紀 口縫部破片
SD 9	Fig.25-2	土師質土器 内耳土壺	— — —	耳縫貼付け側外側は突 出し、体部内両気味に 立ち上がる。	内外側口縫部横模様のヘ ラナデ。	雪白、石系、良石粒を 含む。 良好	墨褐色(10YR3/1) にじい褐色(7.5YR6/4)	15世紀 口縫部破片 外側にスス付着
SD 9	Fig.25-3	土師質土器 内耳土壺	— — —	耳縫貼付け側外側は突 出し、体部内両気味に 立ち上がる。	内外側口縫部横模様のヘ ラナデ。	石系、良石粒を含む。 良好	墨褐色(10YR3/1) 明赤褐色(5YR3/2)	15世紀 口縫部破片 外側にスス付着
SD 9	Fig.25-4	土師質土器 内耳土壺	— — —	耳縫貼付け側外側は突 出し、体部内両気味に 立ち上がる。	内外側口縫部横模様のヘ ラナデ。	石系・黑色粒子・長石 粒を含む。良好	墨褐色(10YR3/1) 明赤褐色(5YR3/2)	15世紀 口縫部破片 外側にスス付着

中世SD08(1), 09・SK13(Fig.25)

番号	設置場所	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
SD 9	Fig.25-5 土器質土器 内耳土器	耳部黏付け部外縁は突出し、体部内側突起に立ち上がる。	—	内外面口縁部横作のヘラナデ。	石英・黒色粒子・長石粒を含む。 良好	にぶい褐色 (7.5YR5/4) 暗褐色(7.5YR5/4)	15世紀 口縁部破片 外側にスス付着	
SD 9	Fig.25-6 土器質土器 内耳土器	耳部黏付け部外縁は突出し、体部内側突起に立ち上がる。	—	内外面ヨコナデ。	石英・長石粒を含む。 良好	黒褐色(10YR3/1) 明赤褐色(GYR5/8)	15世紀 口縁部破片	
SD 9	Fig.25-7 土器質土器 内耳土器	耳部黏付け部外縁は突出し、体部内側突起に立ち上がる。	—	内外面ヨコナデ。	石英・長石粒を含む。 良好	にじい赤褐色 (5YR4/3)	15世紀 口縁部破片	
SD 9	Fig.25-8 土器質土器 上鍋	— — (2.5) 20.0	平底の底部から全体は外縁して立ち上がる。	外側全体ヘラナデ。底部 ヘラナデ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む。 良好	黒褐色(10YR3/2) 灰白色(7.5YR8/2)	15世紀 底面部破片 外側にスス付着	
SD 9	Fig.25-9 土器質土器 内耳土器	— — (3.2) 14.0	平底の底部から全体は外縁して立ち上がる。	外側全体ヘラナデ。底部 ヘラナデ。内面ナデ。	雲母・石英・長石粒を含む。 良好	にじい黄褐色 (10YR5/3)	15世紀 底面部破片	
SD 9	Fig.25-10 土器質土器 費	— — (4.5) 9.0	平底の底部から全体は外縁して立ち上がる。	外側全体ヘラケズリ。底 部ヘラケズリ。内面ヘラ ナデ。	石英・長石粒を含む。 良好	にじい赤褐色 (5YR4/3)	底面部 破片	
SD 9	Fig.25-13 土器質土器 内耳土器	32.0 (13.8) —	耳部黏付け部外縁は突出し、体部内側突起に立ち上がる。	内外面ヨコナデ。	白苔状軸物・石英・ 長石粒を含む。 良好	黒褐色(10YR3/1) 褐色(7.5YR5/5)	5世紀 口縁部破片	

法量は上から口径・胴径（最大径）・器高・底径、（ ）は残存高を示す。

# 写 真 図 版



遠景



A区全景



A区全景



B区全景



竪穴住居跡SI05



竪穴住居跡SI05



豊穴住居跡SI01



豊穴住居跡SI01 カマド



豊穴住居跡SI01 挖形



竪穴住居跡SI02



竪穴住居跡SI02 カマド



竪穴住居跡SI02 拴形



豊穴住居跡S103



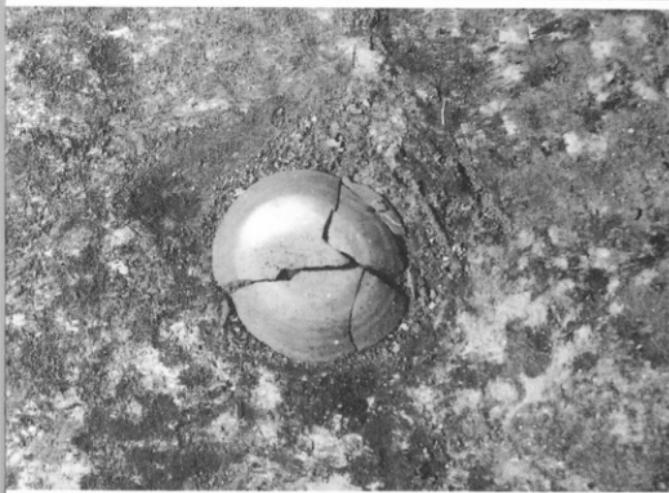
豊穴住居跡S103 カマド



豊穴住居跡S103 摂形



竪穴住居跡SI04



竪穴住居跡SI04



竪穴住居跡SI04 カマド



溝状遺構SD03



溝状遺構SD03



土坑SK05



豊穴状遺構SX01  
溝状遺構SD06



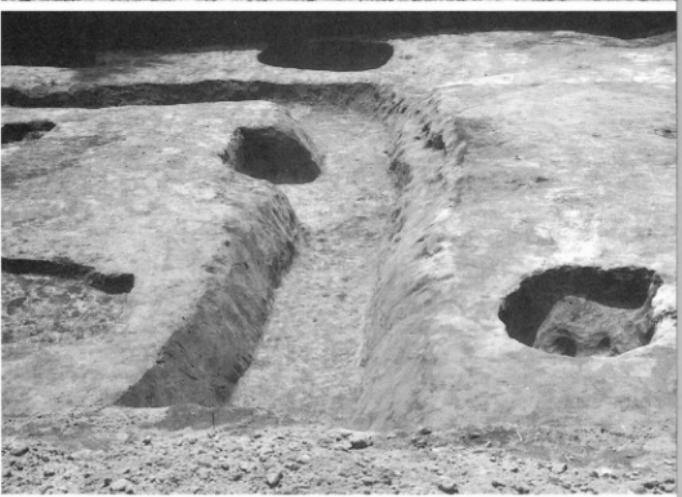
溝状遺構SD08



溝状遺構SD08  
硯出土状況



溝状遺構SD09



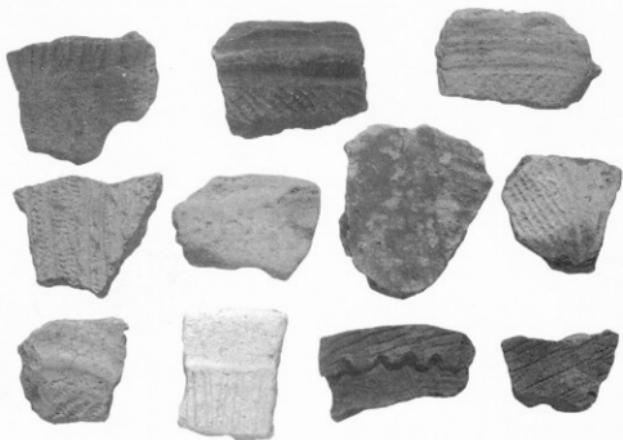
溝状遺構SD09



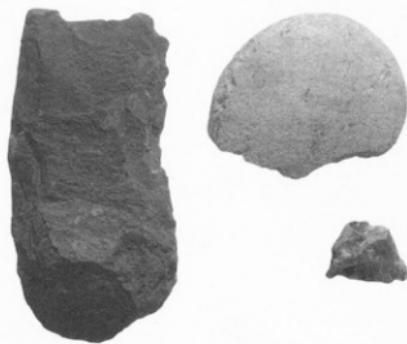
溝状遺構SD09  
獸骨出土状況



1 住居跡S105出土遺物



2 遺構外出土繩文土器



3 遺構外出土石器



1



2



3



4



5



6



7

住居跡SI05出土遺物  
1 ~ 7 SI01



1



2



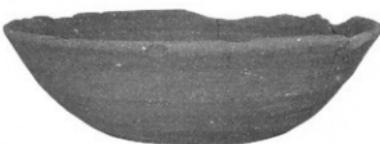
3



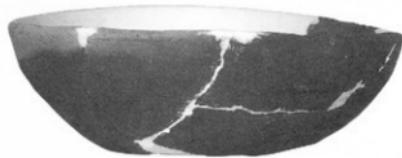
4



5



6



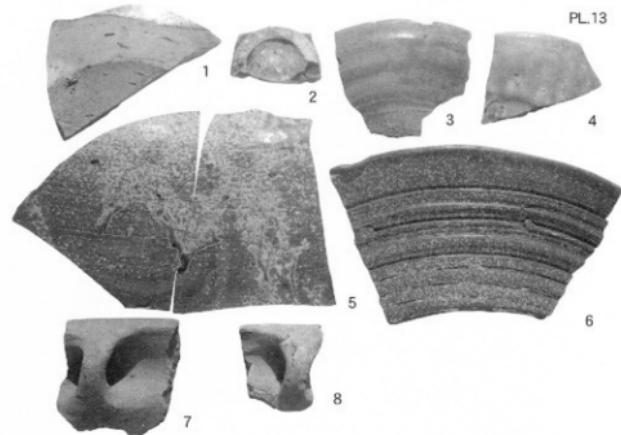
7



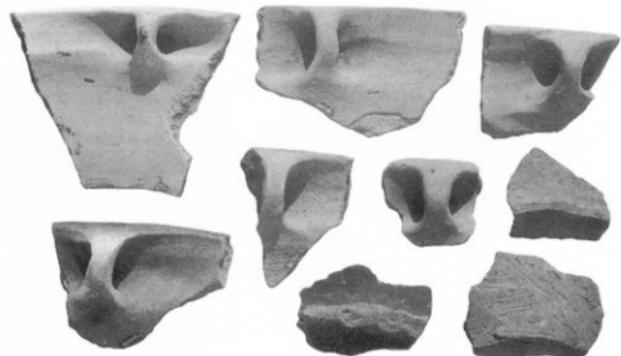
8

住居跡、溝、土坑出土遺物

- 1 ~ 4 住居跡SI02  
 5 ~ 6 住居跡SI04  
 7 ~ 11 ~ 12 溝SD3  
 8 ~ 9 溝SD01  
 10 土坑SK07



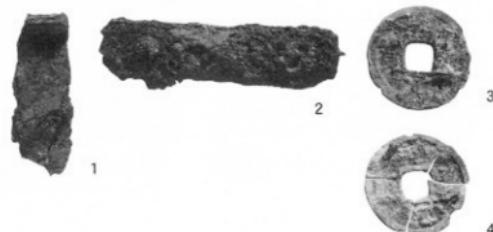
1 中世壺穴状遺構、溝出土遺物  
1 窑穴状遺構SX01  
2 溝SD06  
3 ~ 8 溝SD08



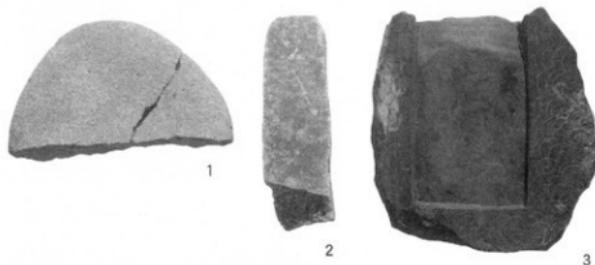
2 中世溝SD09



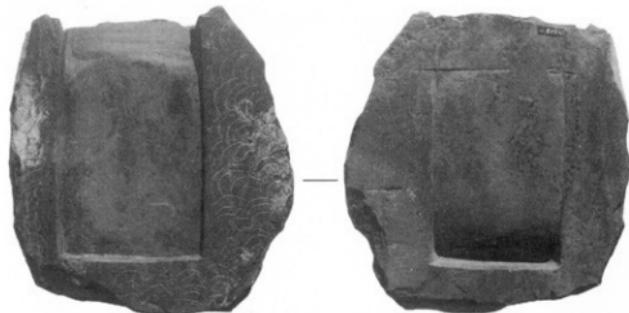
3 中世土坑SK13



1 中世溝SD06-08-09出土遺物  
1 溝SD06  
2 溝SD08  
3 · 4 溝SD09



2 古代住居跡、中世溝出土遺物  
1 古代住居跡S104  
2 · 3 中世溝SD08



3 中世溝出土遺物  
SD08

## 報告書抄録

ふりがな	おおみやまちかみじゅくかみつぼいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	大宮町上宿上坪遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
編著者名	小川和博・大瀬淳志・遠藤智子・大瀬由紀子・大野美佳							
編集機関	有限会社 日考研茨城							
発行機関	大宮町教育委員会							
所在地	〒319-2215 茨城県那珂郡大宮町3135-6 TEL:0295-52-1111 (代)							
発行年月日	2004年3月20日							
取締者 所在地	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上宿上坪遺跡	大宮町宇留野字上坪 193	344	094	36度 32分 23秒	140度 25分 25秒	2003.07.22 ~ 2003.08.22	2,040m <sup>2</sup>	店舗建設工事に伴う 事前調査
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上宿上坪遺跡	集落跡	縄文時代 奈良平安時代 中世・近世	竪穴住居跡 土坑 竪穴状遺構 溝状遺構	5軒 15基 2基 5条	縄文土器・弥生土器 磨石類・打製石斧 土師器・須恵器・陶器 器類・土師質土器・碗・ 砥石・錢貨・鐵製品	中世域路「宇留 野城跡」に隣接 する住居跡群と 中世道跡		

茨城県那珂郡大宮町  
**上宿上坪遺跡発掘調査報告書**

---

平成16年(2004)3月10日 印刷  
平成16年(2004)3月20日 発行

株式会社 ダイナム  
東京都荒川区西日暮里2-27-5 TEL 03-3802-7540  
発行 大宮町教育委員会 茨城県那珂郡大宮町3135-6 TEL 0295-52-1111㈹  
編集 有限会社 日考研茨城 茨城県稟敷郡江戸崎町佐倉3321-1 TEL 029-892-1112  
印刷 有限会社 田辺印刷 茨城県稟敷郡江戸崎町佐倉3321-5

---